

Oracle Application Server

for UNIX インストレーション・ガイド

リリース 4.0.8.2

2000 年 11 月

部品番号 : J02452-01

ORACLE®

Oracle Application Server for UNIX インストール・ガイド リリース 4.0.8.2

部品番号 : J02452-01

原本名 : Oracle Application Server Installation Guide for AIX-Based Systems, Compaq Tru64 UNIX, HP 9000 Series HP-UX, Linux Intel, and Sun Solaris Intel, Release 4.0.8.2

原本部品番号 : A86561-01

Copyright © 2000, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation（米国オラクル）または日本オラクル株式会社（日本オラクル）を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation（米国オラクル）およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	vii
1 要件	
ハードウェア要件	1-2
ソフトウェア要件	1-2
保証されているソフトウェア	1-5
2 インストール前の作業	
インストールの概要	2-2
Oracle Application Server のインストール前に	2-3
Oracle ホーム	2-3
Oracle Server の Oracle ホームとの互換性	2-4
OFA ディレクトリ構造	2-5
シングル・ノードのサイトとマルチ・ノードのサイト	2-6
Net8 の設定	2-7
グループ・メッセージの設定	2-7
Oracle Universal Installer について	2-8
oraInventory ディレクトリ	2-9
Linux カーネルの設定	2-9
3 インストール	
Oracle Universal Installer の起動	3-2
セットアップ・オプションとインストール・オプション	3-5
設定オプション	3-15

概要とインストール	3-28
4 インストール後の作業	
インストール後の設定作業	4-2
oasroot.sh スクリプトの実行	4-2
.login および .profile 初期化ファイルの更新	4-2
Node Manager の起動	4-3
Oracle Application Server の開始にあたって	4-4
Oracle Application Server Web サイトへの接続	4-4
OAS Manager を使用した Oracle Application Server の起動	4-5
「OAS ユーティリティ」 ページへの接続	4-6
コマンドライン・ユーティリティ	4-7
セキュリティ	4-8
5 アンインストール	
アンインストール	5-2
再インストール	5-5
6 前バージョンからの移行	
移行前に	6-2
Database Access Descriptor (DAD)	6-2
仮想パス	6-2
許可	6-2
SSL 証明書	6-2
重複するアプリケーション・ファイル名	6-3
制限事項	6-3
Oracle Application Server 4.0.x からの移行	6-4
プライマリ・ノードの移行ステップ	6-4
リモート・ノードのリスナーの移行ステップ	6-5
移行を元に戻す	6-5
移行処理	6-6
アプリケーションの移行	6-8
Java ベースのアプリケーション	6-8
JavaServer Pages	6-8

EJB および ECO/Java アプリケーション	6-8
---------------------------------	-----

A 環境変数

ORACLE_HOME	A-2
ORACLE_BASE	A-2
ORAWEB_HOME	A-2
ORAWEB_SITE	A-2
ORAWEB_ADMIN	A-2
TNS_ADMIN	A-2
LIBPATH - AIX-Based Systems の場合	A-3
SHLIB_PATH - HP 9000 の場合	A-3
LD_LIBRARY_PATH - Compaq、Solaris Intel および Linux の場合	A-3
CLASSPATH	A-3
PATH	A-3
TMPDIR	A-4

索引

はじめに

このガイドでは、UNIX システムへの Oracle Application Server のインストールについて説明します。この「はじめに」の内容は、次のとおりです。

- [目的](#)
- [対象読者](#)
- [表記規則](#)
- [コマンド構文](#)
- [関連ドキュメント](#)

目的

このガイドおよびご使用のシステム用の『Oracle Application Server リリース・ノート』では、Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 のインストール方法と設定方法を説明します。

対象読者

このガイドは、UNIX システム上に Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 をインストールする方を対象としています。

表記規則

このガイドでは、次の表記規則が使用されています。

固定幅フォント	固定幅フォントは、UNIX コマンド、ディレクトリ名、ユーザー名、パス名、ファイル名および画面に表示されるテキストの引用を示します。
大カッコ []	大カッコで囲まれた単語は、キー名を示します（たとえば、[Return] キーなど）。大カッコがコマンド構文で使用されている場合は、意味が異なるため注意してください。
斜体	斜体文字は、可変部分（ファイル名の可変部分も含む）を示します。また、強調にも使用されます。
太字	太字は、GUI のオプションを示します。
大文字	大文字は、構造化問合せ言語（SQL）の予約語、初期化パラメータおよび環境変数を示します。

UNIX では大・小文字が区別されるため、このガイドの表記規則は他の Oracle 製品のドキュメントとは異なる可能性があります。

コマンド構文

コマンドおよびファイルの内容の例は、すべて固定幅フォントで示され、Bourne シェルの場合を前提としています。UNIX コマンド例の先頭のドル記号 (\$) は、UNIX のコマンド・プロンプトのデフォルトです。これは、入力しないでください。

円記号 ¥	円記号は、長すぎて 1 行に収まらないコマンドを示します。行を表示されているとおりに (円記号を使用して) 入力するか、または円記号を付せずに 1 行で入力してください。 例: <code>dd if=/dev/rdisk/c0t1d0s6 of=/dev/rst0 bs=10b ¥ count=10000</code>
中カッコ {}	中カッコは必須項目を示します。 例: <code>..DEFINE {macro1}</code>
大カッコ []	大カッコはオプション項目を示します。 例: <code>cvtcrt termname [outfile]</code> 大カッコが通常の文で使用されている場合は、意味が異なるため注意してください。
省略記号 ...	省略記号は、同様の項目の任意の回数の繰返しを示します。 例: <code>CHKVAL fieldname value1 value2 ... valueN</code>
斜体	斜体は可変部分を示します。可変部分を値に置き換えてください。 例: <code>library_name</code>
縦線	縦線は、中カッコまたは大カッコ内の選択肢を示します。 例: <code>SIZE filesize [K M]</code>

関連ドキュメント

製品の管理およびチューニングの詳細は、次のドキュメントを参照してください。

マニュアル名	部品番号
Oracle Application Server 概要	J01413-01
Oracle Application Server 管理者ガイド	J01403-01
Oracle Application Server セキュリティ・ガイド	J01411-01
Oracle Application Server Performance and Tuning Guide for AIX-Based Systems, Compaq Tru64 UNIX, HP 9000 HP-UX, Linux Intel, and Sun Solaris Intel	A86664-01
Oracle Application Server PL/SQL アプリケーション開発者ガイド	J01404-01
Oracle Application Server JServlet および JSP アプリケーション開発者ガイド	J01408-01
Oracle Application Server LiveHTML および Perl アプリケーション開発者ガイド	J01405-01
Oracle Application Server EJB、ECO/Java および CORBA アプリケーション開発者ガイド	J01406-01
Oracle Application Server C++ CORBA アプリケーション開発者ガイド	J01407-01
Oracle Application Server PL/SQL Web Toolkit リファレンス	J01419-01
Oracle Application Server PL/SQL Web Toolkit クイック・リファレンス	J01420-01
Oracle Application Server JServlet Toolkit リファレンス	J01425-01
Oracle Application Server JServlet Toolkit クイック・リファレンス	J01426-01
Oracle Application Server カートリッジ・マネージメント・フレームワーク	J01412-01

1

要件

この章では、UNIX 上に Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 をインストールするための要件について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- ハードウェア要件
- ソフトウェア要件
- 保証されているソフトウェア

ハードウェア要件

次の表に、Oracle Application Server 4.0.8.2 のハードウェア要件をプラットフォーム別に示します。

ハードウェア項目	AIX-Based Systems	HP 9000 Series HP-UX	Compaq Tru64 UNIX	Sun Solaris Intel	Linux Intel
CPU	RS/6000	HP 9000 Series HP-UX プロセッサ用 HP-UX 11.0 (32 ビット)	Alpha プロセッサ	Intel プロセッサ	Intel Pentium Pro プロセッサ
メモリー	128 MB	128 MB	128 MB	128 MB	128 MB
ディスク領域	600 MB	600 MB	400 MB	400 MB	400 MB
スワップ領域	256 MB	256 MB	256 MB	256 MB	256 MB

ソフトウェア要件

ご使用のシステムのソフトウェア要件は、次の表を参照してください。

- [表 1-1 「AIX-Based Systems のソフトウェア要件」](#)
- [表 1-2 「HP9000 Series HP-UX のソフトウェア要件」](#)
- [表 1-3 「Compaq Tru64 UNIX のソフトウェア要件」](#)
- [表 1-4 「Sun Solaris Intel のソフトウェア要件」](#)
- [表 1-5 「Linux Intel のソフトウェア要件」](#)

表 1-1 AIX-Based Systems のソフトウェア要件

ソフトウェア項目	バージョン
オペレーティング・システム	AIX 4.3.3
ブラウザ	Netscape Communicator: 4.5.1、4.6、4.7 (JDK 1.1.6 準拠のブラウザ)
JDK	1.2.2

表 1-2 HP9000 Series HP-UX のソフトウェア要件

ソフトウェア項目	バージョン
オペレーティング・システム	<p>HP-UX 11.0 (32 ビット) 以上</p> <p>HP-UX 11.0 カーネル・パラメータを次のように設定してください。</p> <pre>maxfiles = 2048 maxfiles_lim = 2048 max_thread_proc = 1024</pre> <p>オラクル社では、Oracle Application Server がインストールされるシステムに次の HP-UX カーネル・パッチをインストールすることをお薦めします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ PHCO_15328 1.0 cumulative PFS patch ■ PHCO_16383 1.0 Year HP-UX Operating System Patch tool ■ PHKL_14747 1.0 System hang while flushing dirty buffers ■ PHKL_14750 1.0 Fix pthread_cond_timed-wait(3T) error return ■ PHKL_15674 1.0 VxFS lock held too long fix/perf improvement ■ PHKL_16236 1.0 PM/VM/UFS/async/scsi/io cumulative patch ■ PHKL_16368 1.0 Enhanced thread locking performance ■ PHNE_15995 1.0 cumulative ARPA Transport patch ■ PHSS_16169 1.0 X/Motif2.0 Runtime Sep98 Periodic Patch ■ PHSS_16404 1.0 ld(1) and linker tools cumulative patch ■ PHKL_17935 s700_900 11.00 libpthreads cumulative patch ■ PHKL_18543 s700_800 11.00 PM/VM/VFS/async/scsi/io/DMAPI/JFS/perf cumulative patch ■ PHCO_17556 s700_800 11.0 fsck_vxfs(1M) cumulative patch ■ PHCO_20765 11.0 libc cumulative patch ■ PHKL_20419、PHNE_20094、PHSS_19866、PHSS_21906 ■ PHKL_20202、PHCO_19666、PHKL_20016、PHKL_18543、PHCO20882 (PHKL_21532、PHCO_21187、PHKL_21392 および PHKL_20674 は、PHKL_18543 に必要)

表 1-2 HP9000 Series HP-UX のソフトウェア要件（続き）

ソフトウェア項目	バージョン
	<ul style="list-style-type: none"> ■ AWT を使用するアプリケーションの場合 : PHSS_21472、PHSS_17535、PHSS_20864、PHSS_21493（PHNE_21433 および PHSS_20863 は、PHSS_20864 に必要） ■ Java2 プラットフォームのアプリケーションおよび GUI を使用するアプレット用に HP-UX SDK を実行するには、HP aC++ ランタイム・ライブラリもシステムにインストールされている必要があります。最新バージョンは、パッチ PHSS_21906 により入手可能です。 ■ Euro および Java に関する必要および推奨するパッチの最新情報については、Hewlett-Packard 社のサイトを参照してください。
ブラウザ	Netscape Communicator 4.51、4.6、4.7 (JDK 1.1.6/1.1.7 準拠のブラウザ)
JDK	1.2.2

表 1-3 Compaq Tru64 UNIX のソフトウェア要件

ソフトウェア項目	バージョン
オペレーティング・システム	Tru64 UNIX バージョン 4.0D - 4.0F
ブラウザ	Netscape Communicator: 4.5.1、4.6、4.7 (JDK 1.1.8 準拠のブラウザ)
JDK	1.2.2

表 1-4 Sun Solaris Intel のソフトウェア要件

ソフトウェア項目	バージョン
オペレーティング・システム	Solaris 2.7 (次のパッチを使用) <ul style="list-style-type: none"> ■ 7_x86_Recommended.zip (11/99 の最新パッチ) ■ 106981 - 10.zip (11/99 パッチに対するパッチ) ■ 106981 - 10 Libthread Patch ■ 107637-03 X Input & Output Method Patch ■ 107082-11 Motif 1.2.7_x86 および 2.1.1_x86: Solaris 7 用ランタイム・ライブラリ・パッチ ■ 108377-03 OpenWindows 3.6.1_x86: Xsun パッチ
ブラウザ	Netscape Communicator: 4.51、4.6、4.7 (JDK 1.1.6 準拠のブラウザ)
JDK	1.2.2

表 1-5 Linux Intel のソフトウェア要件

ソフトウェア項目	バージョン
オペレーティング・システム	Linux Kernel 2.2.12
システム・ライブラリ	GNU C ライブラリ バージョン 2.1 (一般的に glibc 2.1 と呼ばれる)
ブラウザ	Netscape Communicator: 4.51、4.6、4.7 (JDK 1.1.6 準拠のブラウザ)
JDK	1.2.2

保証されているソフトウェア

表 1-6 に Compaq Tru64 UNIX で保証されているソフトウェアを、表 1-7 に Linux Intel で保証されているソフトウェアを示します。

表 1-6 Compaq Tru64 UNIX、AIX および HP-UX で保証されているソフトウェア

ソフトウェア項目	バージョン
HTTP リスナー	Oracle Listener 4.0.8.2.0 (Spyglass 2.14 国内版) 128 ビット暗号化 Netscape Enterprise Server 4.04 Apache 1.3.9

表 1-6 Compaq Tru64 UNIX、AIX および HP-UX で保証されているソフトウェア（続き）

ソフトウェア項目	バージョン
Oracle RDBMS	8.0.6 8.1.6
JAVA Developer Kit (JDK)	1.2.2

表 1-7 Linux Intel で保証されているソフトウェア

ソフトウェア項目	バージョン
HTTP リスナー	Oracle Listener 4.0.8.2.0 (Spyglass 2.14 国内版) 128 ビット暗号化 Apache 1.3.9
Oracle RDBMS	8.1.6
JAVA Developer Kit (JDK)	1.2.2

表 1-8 Solaris Intel で保証されているソフトウェア

ソフトウェア項目	バージョン
HTTP リスナー	Oracle Listener 4.0.8.2.0 (Spyglass 2.14 国内版) 128 ビット暗号化 Apache 1.3.9
Oracle RDBMS	8.0.6 8.1.6
JAVA Developer Kit (JDK)	1.2.2

Oracle Application Server で保証されているソフトウェアの完全なリストは、次の URL から「Internet Support Center」→「技術情報 - ORACLE 製品 FAQ」を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

インストール前の作業

この章では、Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 のインストール手順の概要および環境設定について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- [インストールの概要](#)
- [Oracle Application Server のインストール前に](#)
- [Oracle Universal Installer について](#)
- [Linux カーネルの設定](#)

インストールの概要

この項では、Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 のインストール作業の概要を説明します。

- 使用する Oracle ホーム・ディレクトリを決定する。
- 最適フレキシブル・アーキテクチャを使用するかどうかを決定する。
- マルチ・ノードを使用するかどうかを決定する。
- Oracle Universal Installer を起動する。
- Oracle Application Server のサイト情報を設定する。
- グループ・メッセージを設定する。
- Web リスナーを設定する。
- マルチ・ノードを設定する。

注意： この作業は、Oracle Application Server を複数のノードにまたがってインストールする場合にのみ必要です。

- Net8 を設定する。
- Oracle Application Server を起動する。

この章では、インストール前の作業を説明します。使用する Oracle ホーム・ディレクトリ、最適フレキシブル・アーキテクチャを使用するかどうか、およびマルチ・ノードを使用するかどうかの決定が含まれます。

[第3章「インストール」](#)では、インストール作業を説明します。Oracle Universal Installer の起動、Oracle Application Server のサイト情報の設定、グループ・メッセージの設定、Web リスナーの設定、マルチ・ノードの設定および Net8 の設定が含まれます。

[第4章「インストール後の作業」](#)では、インストール後の作業を説明します。Oracle Application Server の起動が含まれます。

Oracle Application Server のインストール前に

Oracle Application Server のインストールを開始する前に、次の設定オプションについて検討してください。

- [Oracle ホーム](#)
- [Oracle Server の Oracle ホームとの互換性](#)
- [OFA ディレクトリ構造](#)
- [シングル・ノードのサイトとマルチ・ノードのサイト](#)
- [Net8 の設定](#)
- [グループ・メッセージの設定](#)

Oracle ホーム

Oracle ホームは、Oracle 製品が稼動するシステム・コンテキストです。このコンテキストは、製品がインストールされるディレクトリの場所、対応するシステム・パスの設定、その Oracle ホーム・ディレクトリにインストールされる製品に関連付けられるプログラム・グループ（該当する場合）、そして Oracle ホーム・ディレクトリから起動されるサービスで構成されます。

複数の Oracle ホーム

Oracle Universal Installer では、同じシステム上での複数のアクティブな Oracle ホーム・ディレクトリのインストールをサポートしています。複数の Oracle ホーム・ディレクトリから同時に複数の Oracle 製品を実行することが可能です。

ある Oracle ホーム・ディレクトリにインストールされた製品は、他の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールされた製品と競合または対話しません。どの Oracle ホーム・ディレクトリのソフトウェアも、その Oracle ホーム・ディレクトリにインストールされているすべてのアプリケーション、サービスおよびプロセスがシャットダウンされていれば、いつでも更新できます。他の Oracle ホーム・ディレクトリのプロセスは実行中でも構いません。

既存の Oracle ホーム

すでにご使用のシステムに Oracle 製品がインストールされている場合、Oracle Universal Installer で、既存の Oracle ホーム・ディレクトリのリストが表示されます。このリストから Oracle ホーム・ディレクトリを選択するか、あるいは新しい Oracle ホーム・ディレクトリを作成できます。このリストは、次の情報をもとに作成されます。

- 以前に Oracle Universal Installer によって作成されたすべての Oracle ホーム・ディレクトリ。

- /etc/oratab ファイルに指定されているすべての Oracle ホーム・ディレクトリ。これらの Oracle ホーム・ディレクトリに Oracle Application Server をインストールすることはできません。
- ORACLE_HOME 環境変数で指定されている Oracle ホーム・ディレクトリ。

Oracle Application Server のインストールを開始したときに、Oracle ホーム・ディレクトリの場所を指定するよう、Oracle Universal Installer から求められます。デフォルトのパス（現在のメインの Oracle ホーム・ディレクトリ）を使用するか、あるいは別のパスを選択できます。

ORACLE_HOME 環境変数の設定

- ORACLE_HOME 環境変数を設定するには、次のようにします。
 - － C シェルの場合
\$ setenv ORACLE_HOME full_path
 - － Bourne/Korn シェルの場合
\$ ORACLE_HOME=full_path
\$ export ORACLE_HOME
- ORACLE_HOME 環境変数が正しく設定されているかどうかを検証するには、次のようにします。
 - － C シェルまたは Bourne/Korn シェルの場合
\$ echo \$ORACLE_HOME

Oracle Server の Oracle ホームとの互換性

Oracle Application Server を Oracle Server と同じ Oracle ホーム、またはご使用のシステムと同じノード上の異なる Oracle ホーム・ディレクトリにインストールできるかどうかについては、表 2-1 を参照してください。

表 2-1 データベースの Oracle ホームの互換性

データベースのバージョン	同じ Oracle ホーム	異なる Oracle ホーム
8.1.6.0 より前	互換性なし	互換性あり
8.1.6.0	互換性あり	互換性あり
8.1.6.1 ～ 8.1.6.x	「Oracle 8.1.6.1 との非互換性」を参照	「Oracle 8.1.6.1 との非互換性」を参照
8.1.7.0 以降	互換性なし	互換性あり

Oracle 8.1.6.1 との非互換性

8.1.6.x のほとんどのパッチ・セットは、完全下位互換性のある 8.1.6.0 の Oracle ホーム・ディレクトリにインストールできます。ただし、オラクル社では Oracle Application Server を Oracle 8.1.6.1 と同じ Oracle ホームにインストールすることはお薦めしません。

OFA ディレクトリ構造

最適フレキシブル・アーキテクチャ (OFA) は、複数の Oracle 製品の保守、管理およびアップグレード作業の実施を容易にするディレクトリ構造です。

次の 2 つの設定オプションのいずれかを選択します。

- **OFA:** これを使用すると、製品と設定ファイルが論理的に分割されます。この構造では、既存の設定ファイルに影響を与えずに製品を簡単にアップグレードできます。OFA ディレクトリ構造の場合、管理ファイルは \$ORACLE_BASE ディレクトリに存在します。
- **非 OFA:** これは、ユーザー定義のディレクトリ構造です。独自のディレクトリ構造を作成する場合は、ORACLE_BASE 環境変数を設定しないでください。

ORACLE_BASE 環境変数の設定

最適フレキシブル・アーキテクチャ (OFA) ディレクトリ構造を使用する場合、ORACLE_BASE 環境変数を設定してください。

ORACLE_BASE 環境変数を設定するには、2 つの方法があります。

- Oracle Universal Installer の起動前に ORACLE_BASE を設定する
- インストール中に ORACLE_BASE を設定する

Oracle Universal Installer の起動前に ORACLE_BASE を設定する

Oracle Universal Installer の起動前に ORACLE_BASE 環境変数を設定するには、次のようにします。

- C シェルの場合

```
$ setenv ORACLE_BASE full_path
```
- Bourne/Korn シェルの場合

```
ORACLE_BASE=full_path  
$ export ORACLE_BASE
```

ORACLE_BASE 環境変数の設定を検証するには、次のようにします。

- C シェルまたは Bourne/Korn シェル

```
$ echo $ORACLE_BASE
```

インストール中に ORACLE_BASE を設定する

Oracle Universal Installer では、インストール中に ORACLE_BASE を設定できます。

インストール中の OFA オプションの実行条件は、次のとおりです。

- Oracle Universal Installer によって事前設定済みの ORACLE_BASE 環境変数が検出された場合、自動的に OFA 準拠のインストールが実行されます。この場合、インストール中に OFA オプション画面は表示されません。
- Oracle Universal Installer によって事前設定済みの ORACLE_BASE 環境変数が検出されなかった場合、インストール中に OFA ディレクトリ構造の設定が可能です。この場合、インストール中に OFA オプション画面が表示されます。

シングル・ノードのサイトとマルチ・ノードのサイト

Oracle Application Server には複数のコンポーネントが存在し、各コンポーネントをネットワーク上の複数のシステムで実行できます。異なるシステムにプロセスを分散させると、パフォーマンスの向上、スケーラビリティおよび柔軟性という利点があります。これらの利点については、『Oracle Application Server 概要』を参照してください。

Oracle Application Server には、次の 2 つのサイト設定オプションがあります。

- **シングル・ノード・インストール**：プライマリ・ノードと呼ばれる 1 つのマシンで構成され、このマシンにすべてのコンポーネント、設定およびデータが含まれます。
- **マルチ・ノード・インストール**：1 つのマシンにインストールされたプライマリ・ノード、および異なるマシンにインストールされた 1 つ以上のリモート・ノードで構成されます。リモート・ノードは、プライマリ・ノードの OAS 機能のサブセットを備えたマシンです。プライマリ・ノードにより、受信リクエストがリモート・ノードに割り当てられて処理されます。

注意： 各リモート・ノードに、Oracle Application Server をインストールする必要があります。詳細は、『Oracle Application Server 概要』を参照してください。

インストール中に、マルチ・ノード・インストールのリモート・ノードの設定を選択できます。デフォルトは、プライマリ・ノードのインストールです。

マルチ・ノード設定を使用する場合、Oracle Application Server のサイトは、1 つのサブネット内に存在する必要があります。

注意： サブネットは1つのネットワーク上のシステムのグループで、地理的な場所またはローカル・エリア・ネットワークを示します。サブネットを使用すると、そのネットワーク上のすべてのシステムで1つのネットワーク・アドレスを共有して、インターネットへ接続できます。

Net8 の設定

Net8 Server または Net8 Client がインストールされると、Oracle Universal Installer により、自動的に Net8 Configuration Assistant が起動されます。Net8 Configuration Assistant は、Oracle クライアント / サーバー・ネットワーク環境を設定し、Oracle データベースに接続するためのグラフィカル・ユーザー・インタフェース（GUI）ツールです。

Net8 Configuration Assistant は、次のようにして起動できます。

- すべてのインストール・タイプについて、Oracle Universal Installer から自動的に起動される。
- スタンドアロン・ツールとして手動で起動する。

手動で Net8 Configuration Assistant を起動するには、次のコマンドを実行します。

```
$ $ORACLE_HOME/bin/netca
```

Net8 Configuration Assistant により、インストール中に選択した内容と一貫したプロファイルが自動的に作成されます。Oracle Universal Installer により、Net8 Configuration Assistant が自動的に実行され、クライアントの \$ORACLE_HOME/network/admin ディレクトリ内に存在するローカル・ネーミング・ファイル内にネット・サービスが設定されます。

インストールの完了後、次のコマンドを使用して、Net8 Assistant で詳細設定を行うことが可能です。

```
$ $ORACLE_HOME/bin/netasst
```

Oracle ネットワークの完全な設定方法については、このガイドの対象範囲外です。『Oracle8i Net8 管理者ガイド』で詳細に説明されています。

グループ・メッセージの設定

グループ・メッセージは、マルチキャストとも呼ばれ、メッセージをネットワーク上のすべてのシステムまたはシステムのサブセットにブロードキャストできます。グループ・メッセージは、複数のマシンに情報を同時に送信する効率的な方法です。グループ・メッセージにより、次のことが可能です。

- 特定のサイト内で関連付けられているすべてのノード間の通信
- ネットワーク上のすべてのシステムまたはシステムのサブセットへのメッセージの配信
- サイト内の様々なコンポーネント間におけるメトリック情報の転送

マルチキャスト IP アドレス: Oracle Universal Installer により、グループ・メッセージ用の IP アドレスがランダムに生成されます。

グループ・メッセージを使用するマルチ・ノード・インストールの場合、次の点に注意してください。

- 通信の競合を防ぐため、各マルチ・ノード・インストールごとに異なる IP アドレスを使用する必要があります。
- プライマリ・ノードがすべてのリモート・ノードと通信できるよう、マルチ・ノード環境内のすべてのマシンで同じマルチキャスト IP アドレスを使用する必要があります。

様々なサイズのネットワークおよびサービスをサポートするために、IP アドレスはすべて A から D までのクラスに分類されます。クラス D アドレス空間は、マルチキャスト専用に確保されている IP アドレスの範囲です。マルチキャスト専用に確保されている IP アドレスの範囲は、224.0.0.0 から 239.255.255.255 までですが、一部、例外があります。確保されている IP アドレスの範囲は、次のとおりです。

- 224.0.0.0 から 224.0.0.255
- 239.0.0.0 から 239.255.255.255

マルチキャスト・ポート番号: これは、マルチキャスト・グループ・メッセージを受信するポートです。このポート番号は、インストール時に 1024 から 65535 の有効範囲内からランダムに生成されます。

Oracle Universal Installer について

Oracle Application Server では、Oracle Universal Installer を使用して環境変数を設定し、コンポーネントをインストールします。Oracle Universal Installer では、システムによりインストール・プロセスの各ステップがガイドされ、設定オプションを選択して製品をカスタマイズすることが可能です。

このインストーラには、次の作業を実行する機能が含まれています。

- 製品のインストール・オプションを調べ、提示する。
- 事前設定済みの環境変数および設定を検出する。
- インストール中に環境変数やその他の設定を行う。
- 製品をアンインストールする。

oraInventory ディレクトリ

Oracle Universal Installer を初めて実行したときに oraInventory ディレクトリが作成され、システムにインストールされる製品のインベントリおよびその他のインストール情報が保管されます。このディレクトリは、oraInventory と呼ばれます。すでに Oracle 製品がインストールされている場合、oraInventory ディレクトリが存在している可能性があります。

oraInventory ディレクトリおよびその中のすべてのファイルに対する書込み権限を持っていて、Oracle Universal Installer を実行できることを確認してください。

インストール中に、UNIX グループ名を指定する必要があります。この名前を指定すると、Oracle Universal Installer により oraInventory ディレクトリに対する許可が付与されます。別のグループが Oracle Universal Installer を実行しようとした場合、そのグループに oraInventory ディレクトリに対する許可が必要になります。許可がない場合、インストールは失敗します。

oraInventory の場所は /etc/var/opt/oracle/oraInst.loc で定義されています。

以前のインストール・セッションのログ・ファイル名は、installActionsdatetime.log の形式です。最新のログ・ファイルは、次のようになります。

```
oraInventory_location/logs/installActions.log
```

oraInventory ディレクトリまたはその内容を削除したり、手動で変更しないでください。そうした場合、Oracle Universal Installer が正常に機能しなくなる可能性があります。

Linux カーネルの設定

Oracle Application Server を Linux システムにインストールする場合、カーネルが正しく設定されていることを確認する必要があります。Oracle Application Server では、ユーザーあたりのプロセス制限を高い値にする必要があります。カーネル情報を表示するには、次のコマンドを使用します。

```
ulimit -a
```

最低でも次の設定になるようにカーネルを再設定してください。そうしないと、Oracle Application Server は起動しません。

```
processes=1024  
nofiles=1024
```

カーネルの設定については、ご使用の Linux のドキュメントを参照してください。

インストール

この章では、ご使用のシステムに Oracle Application Server 製品をインストールする方法について説明します。インストールを開始する前に、第 1 章と第 2 章に示されている作業を確認し、完了してください。この章の内容は、次のとおりです。

- [Oracle Universal Installer の起動](#)
- [セットアップ・オプションとインストール・オプション](#)
- [設定オプション](#)
- [概要とインストール](#)

Oracle Universal Installer の起動

Oracle Universal Installer を起動するには、次のステップを実行します。

1. すべての Oracle プロセスおよびサービス（たとえば、Oracle RDBMS サービス）を停止します。
2. インストレーション CD-ROM をマウントします。

Oracle 製品の CD-ROM は、RockRidge フォーマットです。

HP-UX の場合、次の手順に従って手動で CD-ROM をマウントする必要があります。CD-ROM を手動でマウントまたはアンマウントするには、root 権限が必要です。ドライブから CD-ROM を取り出す前に、必ず CD-ROM をアンマウントしてください。

- a. システム・エディタを使用して、`/etc/pfs_fstab` ファイルに次の行を追加します。

```
device_file mount_point filesystem_type translation_method
```

詳細は、次のとおりです。

`device_file` は、CD-ROM デバイス・ファイルです。

`mount_point` は、マウント・ポイントです。

`filesystem_type` で、マウントされる CD-ROM が Rockridge 拡張子であることを指定します。

`translation_method` には、変換タイプを指定します。

たとえば、次のようになります。

```
/dev/dsk/c5t2d0 /SD_CDROM pfs-rrip xlat=unix 0
```

- b. root ユーザーでログインします。

```
$ su root
```

- c. 次のコマンドを入力します。

```
# nohup /usr/sbin/pfs_mountd &  
# nohup /usr/sbin/pfsd &
```

- d. CD-ROM をトレイに入れ、次のコマンドを入力して CD-ROM をマウントします。

```
# /usr/sbin/pfs_mount /SD_CDROM
```

- e. root アカウントを終了します。

```
# exit
```

AIX-Based Systems、Compaq Tru64 UNIX、Linux Intel および Sun Solaris Intel で CD-ROM をマウントするには、次のステップを実行します。

a. CD-ROM ドライブに Oracle Application Server の CD-ROM を挿入します。

b. root ユーザーでログインします。

c. CD-ROM のマウント・ポイント・ディレクトリを作成します。

```
# mkdir cdrom_mount_point_directory
```

d. 次のようにして、CD-ROM ドライブをマウント・ポイント・ディレクトリにマウントし、root アカウントを終了します。

```
# mount options device_name cdrom_mount_point_directory
# exit
```

次の例では、CD-ROM を /cdrom にマウントしています。

AIX-Based Systems の場合：

```
# mkdir /cdrom
# mount -r -v cdrfs /dev/cd/ /cdrom
# exit
```

Compaq の場合：

```
# mkdir /cdrom
# mount -r devicename /cdrom
# exit
```

Solaris Intel の場合：

```
# mkdir /cdrom
# mount -r -F hsfs device_name /cdrom
# exit
```

Linux の場合：

```
# mkdir /cdrom
# mount -r -v cdrfs /dev/cd/ cdrom
# mount -r -F hsfs device_name /cdrom
# exit
```

3. CD-ROM から Oracle Universal Installer を実行します。

a. oracle ユーザーでログインします。

注意： Oracle Universal Installer を起動する際、root ユーザーでログインしていないことを確認してください。root ユーザーでログインすると、root ユーザーのみが Oracle Application Server の権限を持つことになります。

- b.** CD-ROM のインストーラのディレクトリに移動します。

```
$ cd mount_point_directory
```

- c.** 次のコマンドでインストーラを起動します。

```
$ Install/Disk1/runInstaller &
```

セットアップ・オプションとインストール・オプション

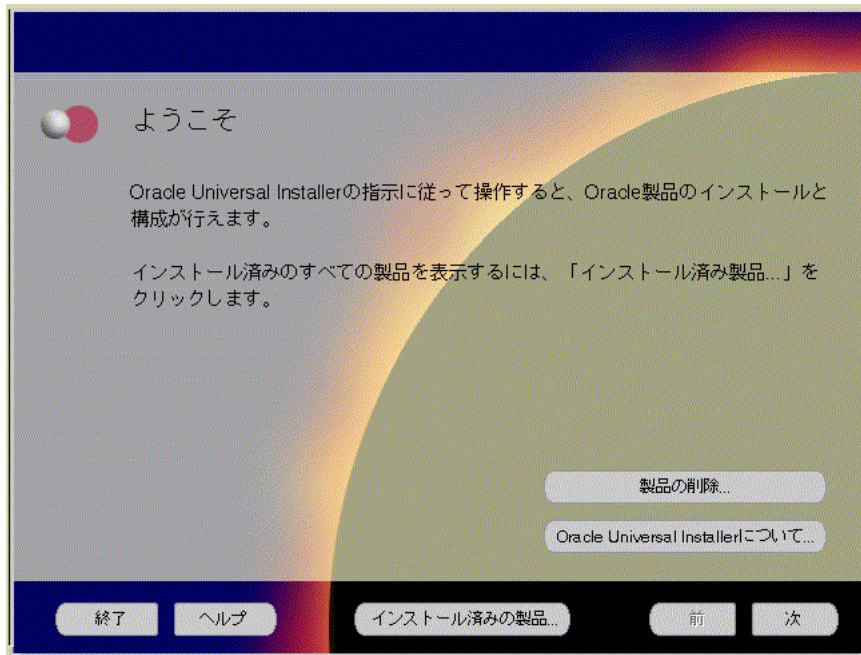
このセクションでは、Oracle Universal Installer の最初の数画面について説明します。次の作業が含まれます。

- 「Oracle Universal Installer」画面の設定を確認する。
- Oracle Application Server の場所にパスを設定する。
- インストール・タイプおよび使用可能な製品とコンポーネントを選択する。

インストールを行うには、次のステップを実行します。

1. 「ようこそ」画面には、Oracle Application Server に関する情報が表示されます。「ようこそ」画面の内容を確認し、「次」をクリックします。

図 3-1 ようこそ



次の機能のボタンは、この画面にのみ表示されます。

- **製品の削除**: 個別のコンポーネントまたは製品全体をアンインストールします。
- **Oracle Universal Installer について**: 使用中の Oracle Universal Installer のバージョン番号を表示します。

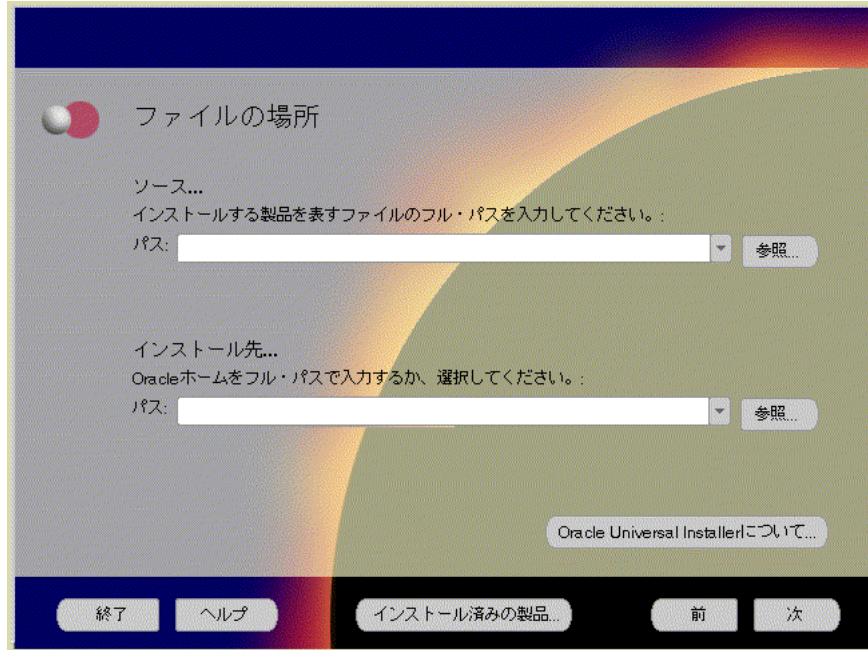
次の機能のボタンは、すべてのインストール画面に表示されます。

- **終了**: インストール・プロセスを中断して Oracle Universal Installer を終了します。
- **ヘルプ**: 各画面の機能に関する詳細情報を表示します。
- **インストール済みの製品**: 現在インストールされている製品を表示し、単独のコンポーネントまたは製品全体をアンインストールします。
- **前**: 前の画面に戻ります。
- **次**: 次の画面に移動します。

注意: 「製品の削除」ボタンは、「ようこそ」画面にのみ表示されます。それ以外の画面からアンインストールを実行する場合は、「インストール済みの製品」ボタンを使用してください。

2. ソースとインストール先のパスを設定し、「次」をクリックします。

図 3-2 ファイルの場所



「ファイルの場所」画面では、Oracle Application Server のソースおよびインストール先の場所の絶対パスを設定します。

- **ソース**: インストールする製品の絶対パス。Oracle Universal Installer により、インストール・プログラムのソースの絶対パスのデフォルト値が検出され、使用されます。
- **インストール先**: 製品がインストールされる \$ORACLE_HOME ディレクトリの絶対パス。Oracle Universal Installer により、インストール済みの製品用に作成済みの \$ORACLE_HOME ディレクトリがすべて検出されます。ドロップダウン・リストをクリックして以前に設定済みの \$ORACLE_HOME ディレクトリを選択するか、または「インストール先」フィールドに新しい \$ORACLE_HOME ディレクトリを指定します。新しく指定する \$ORACLE_HOME ディレクトリに絶対パスが含まれていることを確認してください。

ORACLE_HOME の詳細は、2-4 ページの「[OFA ディレクトリ構造](#)」を参照してください。

- **参照**: ディレクトリ内を移動し、ソースおよびインストール先の場所を探します。

3. UNIX グループ名を入力し、「次」をクリックします。

図 3-3 UNIX グループ名



「UNIX グループ名」画面は、Oracle Universal Installer がそのシステム上で初めて実行されたときに表示されます。UNIX グループ名により、指定されたグループに oraInventory ディレクトリの許可が付与されます。詳細は、2-9 ページの「[oraInventory ディレクトリ](#)」を参照してください。

UNIX グループ名: UNIX グループ名を指定するには、次の 2 つの方法があります。

注意: ここで指定されたグループ以外のグループのユーザーが Oracle Universal Installer を実行しようとする、インストールは失敗します。

- Oracle Application Server を設定する許可を持つ UNIX グループ名を入力します。
Oracle Universal Installer が起動されている端末ウィンドウで次のコマンドを入力して、グループ名を検証します。

```
$ id
```

- `/tmp/OraInstall/orainstRoot.sh` スクリプトを実行し、`root` ユーザーにのみ許可を付与します。このスクリプトを実行するには、`root` 権限が必要です。このスクリプトにより、**Oracle Universal Installer** がコンポーネントをシステムにインストールする際にそのコンポーネントのポインタが作成され、後のインストール手順でそのコンポーネントが識別できるようになります。`oraInventory` ディレクトリのポインタを含む `/etc/var/opt/oracle/oraInst.loc` ファイルが作成されます。

スクリプトの実行後、「OK」をクリックして続けます。

4. インストール・タイプを選択し、「次」をクリックします。

図 3-4 インストール・タイプ



「インストール・タイプ」画面には、Oracle Application Server のインストール・オプションが3つ表示されます。すべてのインストール・タイプで、最適フレキシブル・アーキテクチャ (OFA) ディレクトリ構造の選択が可能です。OFA の詳細は、2-5 ページの「[OFA ディレクトリ構造](#)」を参照してください。

標準インストール

- Oracle Application Server をプライマリ・ノードで実行するために必要なすべてのコンポーネントをインストールします。これには、すべてのランタイム、リスナー、ユーティリティ、管理ツール、Oracle8i Client ソフトウェア、JDK 1.2 およびドキュメントが含まれます。

カスタム・プライマリ・ノード・インストール

- プライマリ・ノード・インストレーションまたはシングル・ノード設定のコンポーネントを選択できます。シングル・ノード・インストールの詳細は、2-6 ページの「[シングル・ノードのサイトとマルチ・ノードのサイト](#)」を参照してください。
- インストールする製品言語を選択できます。

カスタム・リモート・ノード・インストール

- リモート・ノードにインストールするコンポーネントを選択できます。マルチノード・インストールを実行する場合のみ、このオプションを選択してください。マルチ・ノード・インストールの詳細は、2-6 ページの「[シングル・ノードのサイトとマルチ・ノードのサイト](#)」を参照してください。
- インストールする製品言語を選択できます。

5. スクロール・リストを使用して、インストールするコンポーネントを選択して「次」をクリックします。この画面は、標準インストールの場合は表示されません。

図 3-5 使用可能な製品コンポーネント



「使用可能な製品コンポーネント」画面では、コンポーネントを選択したり、選択を解除したりすることができます。

- 下へスクロールし、コンポーネント・リスト全体を確認します。特定のコンポーネントをインストールするには、その横のボックスにチェックを付けます。「インストール状況」には、「新規インストール」、「インストール済み」、「未インストール」および「再インストール」のいずれかが表示されます。
- **製品の言語**：製品の言語を選択します。このリリースで使用可能な言語は、英語、ポルトガル語（ブラジル）、日本語および簡体字中国語です。

6. 画面に表示されているコンポーネントの場所を検証し、必要な場合は変更して、「次」をクリックします。この画面は、Oracle Universal Installer により、\$ORACLE_HOME ディレクトリのディスク領域の不足が検出された場合のみ表示されます。

図 3-6 コンポーネントの場所



「コンポーネントの場所」画面では、一部のコンポーネントについて代替の場所を選択できます。

- **インストールされるすべてのコンポーネントを表示**: インストール用に選択したコンポーネントの完全なリストを表示します。コンポーネント・リストを表示するには、このボックスをクリックします。

インストール先パスの表示または変更を行うには、各コンポーネントをクリックします。Oracle Universal Installer では、画面に表示されたコンポーネントのインストール先を変更できます。

- **インストール先**: 選択したコンポーネントの絶対パスが表示されます。
- **場所の変更**: 選択したコンポーネントについて、別の場所を選択します。
- **使用可能なディスク領域**: 現行ディレクトリに対応する使用可能なディスク領域が表示されます。また、Oracle Universal Installer により、追加コンポーネントのインストールに必要なディスク領域の合計に関する情報も表示されます。

- **directory_name に必要なディスク領域**: 選択されたディレクトリ内へのインストールに必要なディスク領域の合計が表示されます。
- **必要な合計ディスク領域**: 製品のインストールに必要なディスク領域の合計が表示されます。
- **使用可能なすべてのボリュームを表示**: ファイル・システムを参照します。ファイル・システムを表示するには、このボックスをクリックします。

注意: ディスク領域が不足している場合は、赤字でその旨が示され、横に手のアイコンが表示されます。

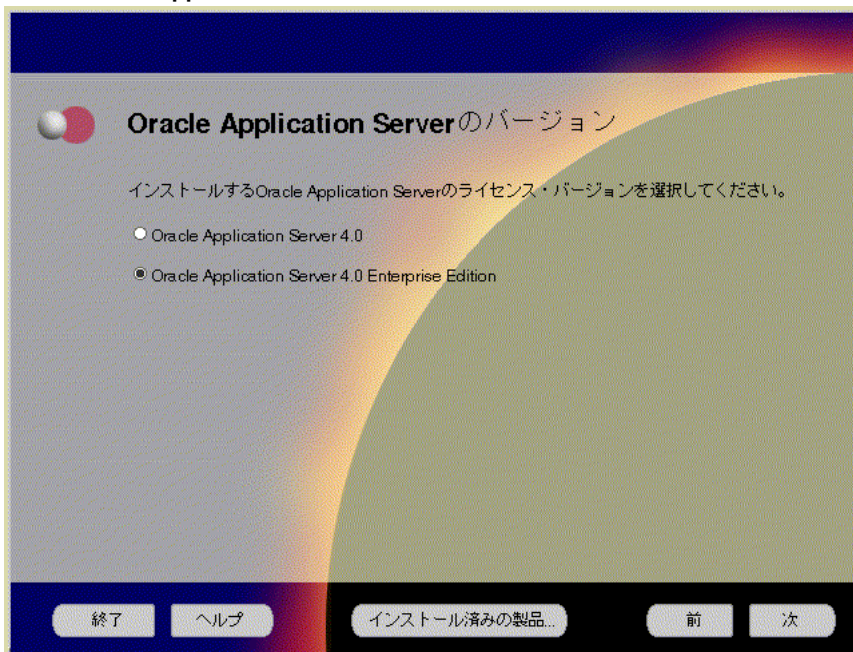
設定オプション

この項では、Oracle Application Server の設定オプションを検証し、変更する方法を説明します。

設定オプションを検証して変更するには、次のステップを実行します。

1. ライセンスを所有している Oracle Application Server のバージョンを選択し、「次」をクリックします。

図 3-7 Oracle Application Server のバージョン



「Oracle Application Server のバージョン」画面では、ライセンスを所有している Oracle Application Server を選択できます。

- **Oracle Application Server 4.0:** Oracle Application Server の標準バージョンをインストールします。
- **Oracle Application Server 4.0 Enterprise Edition:** Oracle Application Server の Enterprise Edition をインストールします。

2. OFA ディレクトリ構造を使用してソフトウェアをインストールする場合は「Yes」を選択し、「次」をクリックします。

図 3-8 最適フレキシブル・アーキテクチャ



「最適フレキシブル・アーキテクチャ」(OFA) オプション画面では、複数の Oracle 製品のメンテナンス、管理およびアップグレード作業を容易にする OFA ディレクトリ構造を選択できます。詳細は、2-5 ページの「[OFA ディレクトリ構造](#)」を参照してください。

注意： インストール前の作業中に ORACLE_BASE が設定されている場合、この画面は表示されません。Oracle Universal Installer により、事前設定済みの ORACLE_BASE 環境変数が検出され、自動的に OFA 準拠インストールが行われます。詳細は、2-5 ページの「[ORACLE_BASE 環境変数の設定](#)」を参照してください。

この画面には、次の 2 つの OFA オプションが表示されます。

- **Yes:** 「Yes」を選択すると、OFA ディレクトリ構造が選択されます。この構造では、設定ファイルに影響を与えずに製品を簡単にアップグレードできます。

- **No:** 「No」を選択すると、OFA ディレクトリ構造は選択されません。ユーザー定義のディレクトリ構造が使用されます。

注意： この画面は、前の画面で OFA 準拠ディレクトリ構造を選択した場合のみ表示されます。

3. ORACLE_BASE 環境変数の値を入力し、「次」をクリックします。

図 3-9 Optimal Flexible Architecture Directory

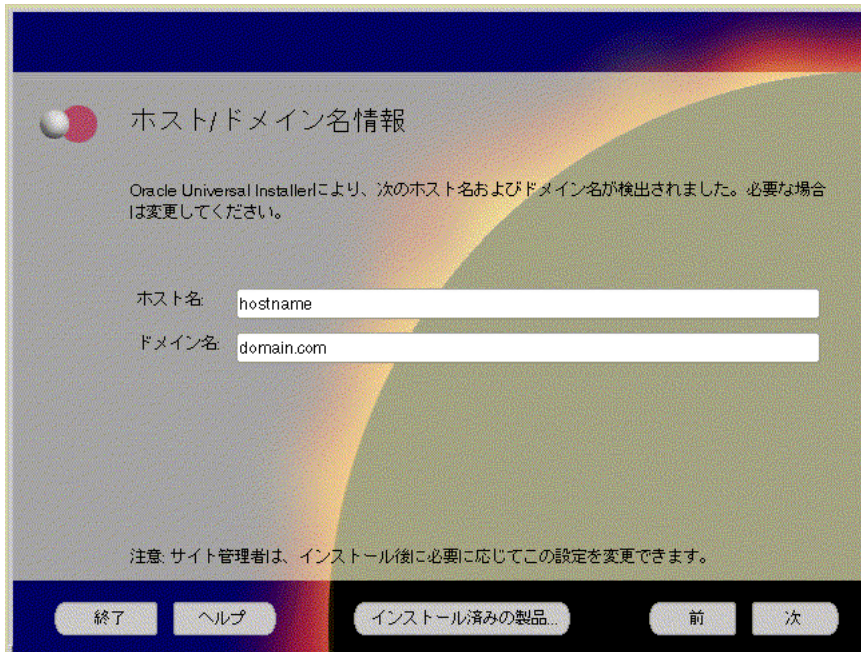


「Optimal Flexible Architecture Directory」画面では、ORACLE_BASE 環境変数のディレクトリを入力できます。ORACLE_BASE は、OFA ディレクトリ構造の場所です。ORACLE_BASE の詳細は、2-5 ページの「[ORACLE_BASE 環境変数の設定](#)」を参照してください。

Oracle Universal Installer により Oracle Application Server の \$ORACLE_HOME ディレクトリが検出され、これが OFA ディレクトリ構造のデフォルトの ORACLE_BASE として使用されます。デフォルトの ORACLE_BASE を選択するか、または新しい ORACLE_BASE を作成できます。新しい ORACLE_BASE を作成する場合は、絶対パスを入力してください。

4. ホストとドメイン名を設定し、「次」をクリックします。

図 3-10 ホスト / ドメイン名情報



ホスト/ドメイン名情報

Oracle Universal Installerにより、次のホスト名およびドメイン名が検出されました。必要な場合は変更してください。

ホスト名:

ドメイン名:

注意: サイト管理者は、インストール後に必要に応じてこの設定を変更できます。

終了 ヘルプ インストール済みの製品... 前 次

「ホスト / ドメイン名情報」画面には、Oracle Universal Installer によって検出されたホストおよびドメイン名が表示されます。

- **ホスト名:** ドメイン・ネーム・サービス (DNS) 内でコンピュータを一意に識別する文字列。インターネットでは、「ホスト」という用語は、インターネット上またはネットワーク上で他のコンピュータと相互アクセス可能なすべてのコンピュータを指します。
- **ドメイン名:** インターネット上で一意に識別されるコンピュータのグループを示します。ドメインは、ネットワーク・アドレスの集合で構成され、1つの地理的または機能的なカテゴリに含まれるホスト・コンピュータのグループを表します。ドメイン・ネーム・サービス (DNS) により、ホスト名とドメイン名の組合せが、インターネット上の特定のコンピュータを表すインターネット・プロトコル (IP) アドレスに変換されます。

5. サイト名およびブート・ポートを入力し、「次」をクリックします。

図 3-11 サイト管理情報

「サイト管理情報」画面では、Oracle Application Server のサイト名およびブート・ポートを入力できます。

- **サイト名**: アクセス可能な Web ファイルの集合である Web サイト名。サイト名は、Oracle Application Server 内の Web ページ・セットを管理するために使用されます。デフォルトのサイト名は website40 です。

注意: インストール後にサイト名を変更することはできません。

- **プライマリ・ホスト**: プライマリ・ノードのホストおよびドメイン名。必ず、絶対ホスト名およびドメイン名を入力してください。たとえば、hal.us.oracle.com などです。

注意： カスタム・リモート・ノード・インストールを選択した場合のみ、この画面に「プライマリ・ホスト」フィールドが表示されます。

- **ブート・ポート：** Oracle Request Broker が接続リクエストを受信するポート。デフォルトは 2649 です。
6. サイト管理者名、Node Manager ポート番号および Admin リスナー・ポートを入力します。サイト管理者のパスワードを入力し、確認のために再度入力して、「次」をクリックします。

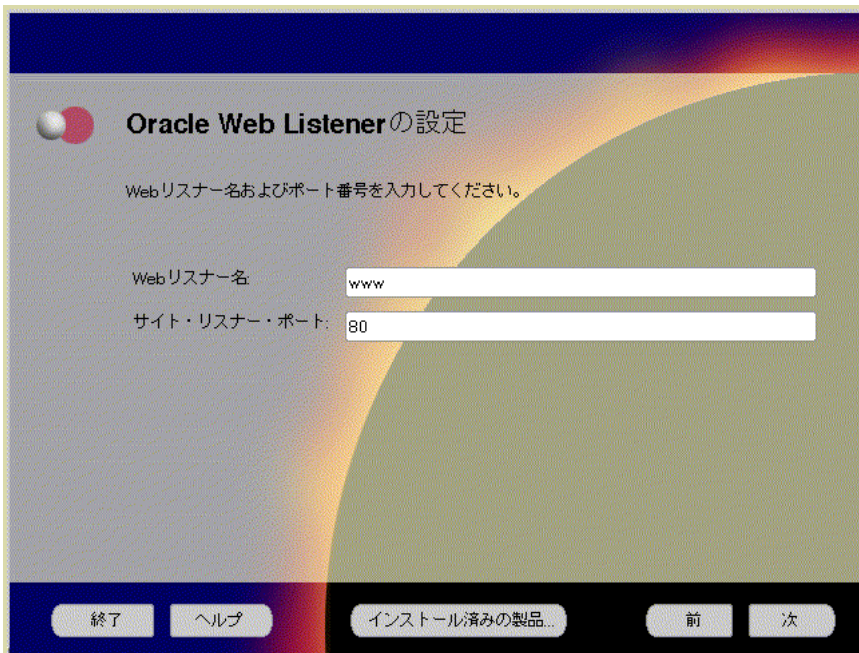
図 3-12 サイトのセキュリティ

「サイトのセキュリティ」画面では、Node Manager ポート番号と Admin リスナー・ポート番号を検証し、サイト管理者のパスワードを入力し、確認のためにパスワードを再度入力できます。Oracle Application Server では、外部クライアントおよび Oracle Application Server 内からのリクエストの処理に HTTP リスナーが使用されます。Oracle Application Server では、Node Manager リスナーおよび Administration Utility リスナーを使用して内部リクエストが処理されます。

- **サイト管理者** : Oracle Application Server Manager を使用して管理作業を実行する Oracle Application Server ユーザーの名前。デフォルト値は `admin` ですが、どのようなユーザー名でも使用できます。
- **Node Manager ポート** : Node Manager リスナーが稼動するネットワーク・ポート番号。デフォルトのポート番号は 8888 です。有効範囲は 1 から 65535 までです。ただし、1024 より小さいポート番号は確保されています。変更する場合は、別のプロセスで使用されていないポート番号を選択してください。別のプロセスには、Oracle Application Server の前バージョンおよび他のアプリケーションが含まれます。
- **Admin リスナー・ポート** : Administration Utility リスナーが稼動するネットワーク・ポート番号。デフォルトのポート番号は 8889 です。有効範囲は 1 から 65535 までです。ただし、1024 より小さいポート番号は確保されています。ポート番号を変更する場合は、一意の番号を選択してください。別のプロセスには、Oracle Application Server の前バージョンおよび他のアプリケーションが含まれます。このフィールドは、**カスタム・リモート・ノード・インストール** の場合は表示されません。
- **パスワードを入力** : サイト管理者のパスワードを入力します。このパスワードは、Administration Utility リスナーの認証にも使用されます。
- **パスワードの確認** : 確認のため、再度パスワードを入力します。

7. Web リスナー名およびサイト・リスナー・ポート番号を設定し、「次」をクリックします。

図 3-13 Oracle Web Listener の設定



Oracle Web Listener の設定

Web リスナー名およびポート番号を入力してください。

Web リスナー名:

サイト・リスナー・ポート:

終了 ヘルプ インストール済みの製品... 前 次

「Oracle Web Listener の設定」画面では、デフォルトの Web リスナー名およびサイト・リスナー・ポート番号を確認し、変更できます。

- **Web リスナー名**: 一般的なリクエストに使用される Web リスナーの名前。デフォルトの Web リスナー名は **www** です。
- **サイト・リスナー・ポート**: Web リスナーが稼動するポート番号。デフォルトのポート番号は **8888** です。オラクル社では、デフォルトを使用することを強くお勧めします。

8. マルチキャスト IP アドレスおよびポート番号を確認し、「次」をクリックします。

図 3-14 グループ・メッセージの設定

「グループ・メッセージの設定」画面には、Oracle Universal Installer によってランダムに生成されたマルチキャスト IP アドレスおよびポート番号が表示されます。グループ・メッセージの詳細は、2-7 ページの「[グループ・メッセージの設定](#)」を参照してください。

注意： カスタム・リモート・ノード・インストールの場合、Oracle Universal Installer により IP アドレスとポート番号はランダムには生成されません。プライマリ・ノードのマルチキャスト IP アドレスとポート番号を入力してください。この情報を取得するには、oasmcastcfg ユーティリティを使用します。

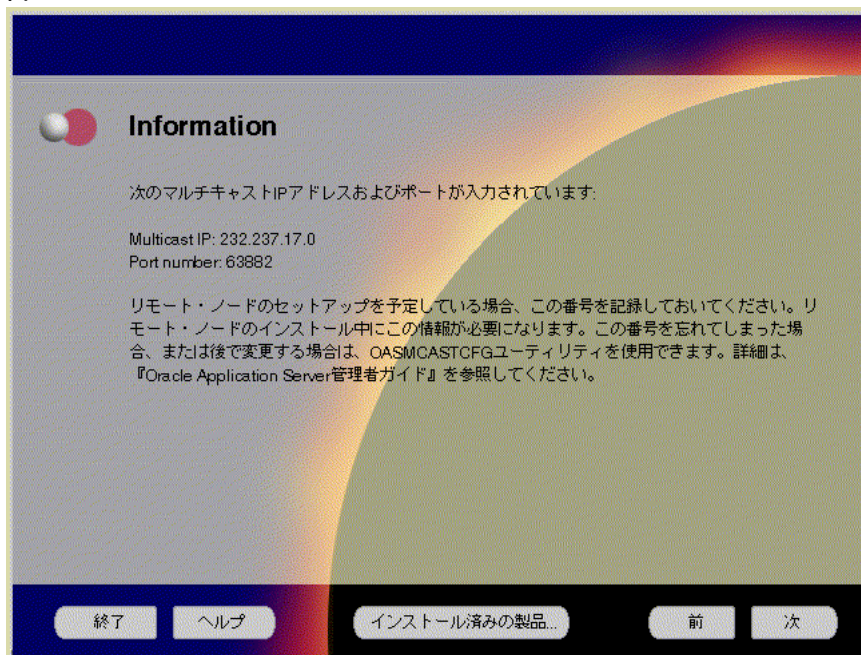
- **マルチキャスト IP アドレス：** Oracle Universal Installer により、グループ・メッセージ用の IP アドレスがランダムに生成されます。デフォルトを使用するか、有効範囲内の IP アドレスを入力します。確保されている IP アドレスについては、2-7 ページの「[グループ・メッセージの設定](#)」を参照してください。

- **マルチキャスト・ポート番号**: これは、マルチキャスト・グループ・メッセージを受信するリスナー・ポートです。このポート番号は、インストール時に 1024 から 65535 の有効範囲内からランダムに生成されます。デフォルトを使用するか、有効範囲内のポート番号を入力します。

注意: マルチキャスト IP アドレスまたはマルチキャスト・ポート番号を取得および変更するには、`oasmcastcfg` ユーティリティを使用します。`oasmcastcfg` ユーティリティの詳細は、4-7 ページの「[コマンドライン・ユーティリティ](#)」および『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

9. マルチキャスト IP およびポート番号を記録し、「次」をクリックします。この画面は、**カスタム・リモート・ノード・インストール**の場合は表示されません。

図 3-15 Information



「Information」画面には、グループ・メッセージ画面のマルチキャスト IP アドレスおよびポート番号が表示されます。インストール後にリモート・ノードを設定する場合は、これらの数値が必要です。

注意： マルチキャスト IP アドレスまたはマルチキャスト・ポート番号を取得および変更するには、oasmcastcfg ユーティリティを使用します。oasmcastcfg ユーティリティの詳細は、4-7 ページの「[コマンドライン・ユーティリティ](#)」および『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

10. `.login` ファイルと `.profile` ファイルを更新するかどうかを選択し、「次」をクリックします。

図 3-16 追加設定



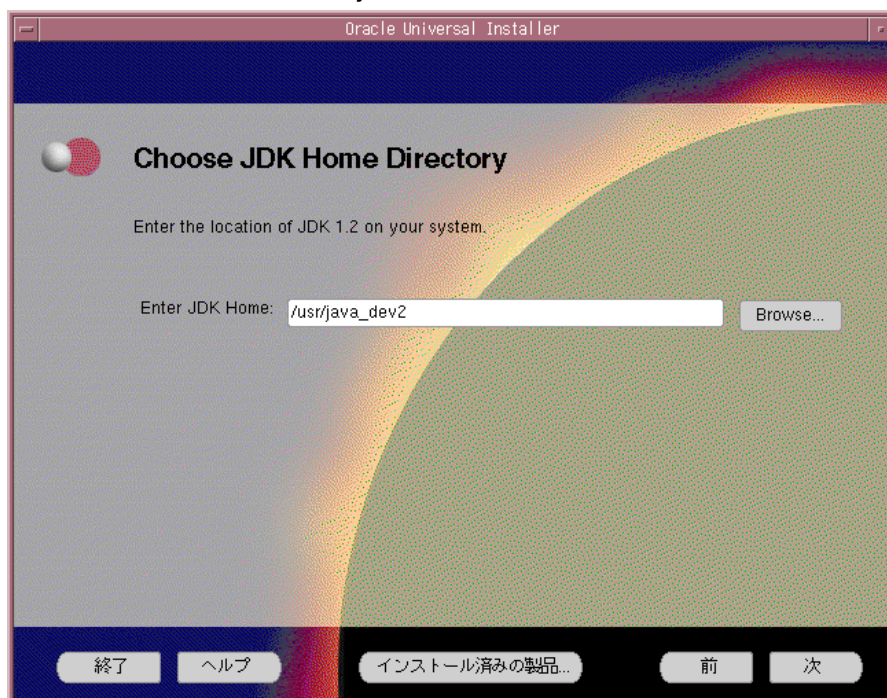
「追加設定」画面により、インストール中に `.login` および `.profile` ファイルの更新を指定できます。

2つの設定オプションがあります。

- **Yes:** Oracle Universal Installer により、Oracle Application Server の `.login` ファイルおよび `.profile` ファイルが設定されます。システムを再起動するとこれらのファイルが実行され、Oracle Application Server 環境が自動的に設定されます。
- **No:** Oracle Universal Installer により、`.login` ファイルおよび `.profile` ファイルを変更しません。Oracle Application Server の環境を手動で設定する必要があります。ファイルを手動で設定する方法については、4-2 ページの「[.login および .profile 初期化ファイルの更新](#)」を参照してください。

11. システム上の JDK の絶対パスを入力し、「次」をクリックします。Oracle Application Server には JDK が必要なため、Oracle Universal Installer により、JDK のパスが自動的に \$ORACLE_HOME/ows/4.0/ ディレクトリにリンクされます。

図 3-17 JDK Home Directory

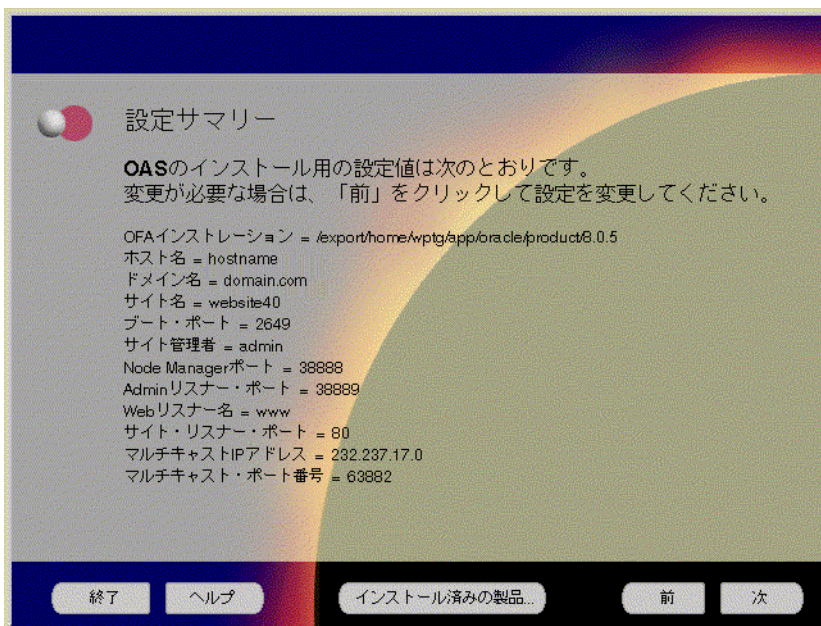


概要とインストール

このセクションでは、インストール・プロセスの開始前に、それ以前の画面で設定した内容をすべて検証する方法を説明します。

1. 設定を確認し、「次」をクリックします。

図 3-18 設定サマリー



「設定サマリー」画面には、Oracle Universal Installer によって検出された設定値が表示されます。

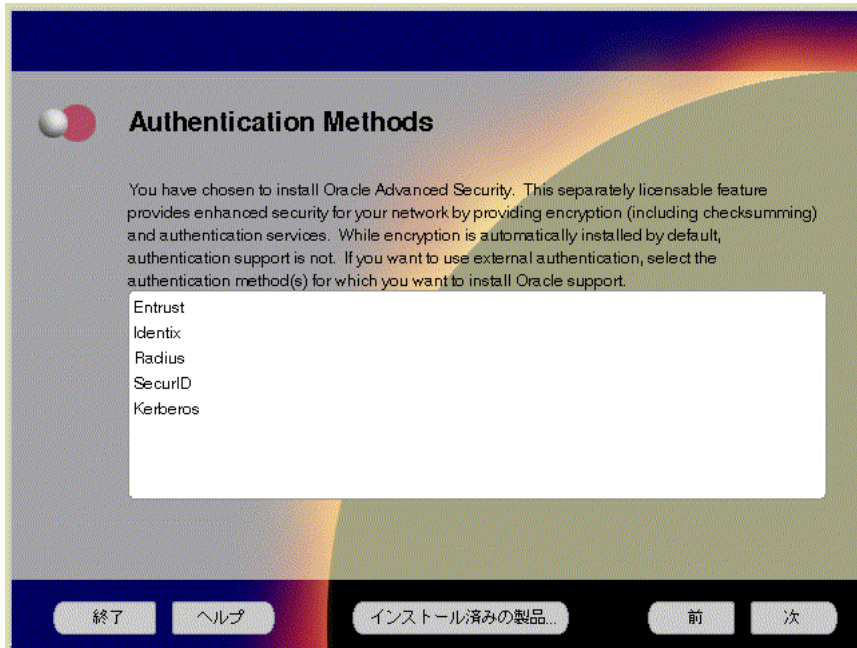
- **OFA インストレーション**: OFA 準拠インストールの場合に使用される ORACLE_BASE ディレクトリ。非 OFA インストールの場合、設定値は「No」です。
- **ホスト名**: ドメイン・ネーム・サービス (DNS) 内でコンピュータを一意に識別する文字列。
- **ドメイン名**: インターネット上で一意に識別されるコンピュータのグループ。ドメインは、ネットワーク・アドレスの集合で構成され、1つの地理的または機能的なカテゴリに含まれるホスト・コンピュータのグループを表します。
- **サイト名**: アクセス可能な Web ファイルの集合である Web サイト名。サイト名は、サイト内の他のすべてのページへのアクセスを提供するホーム・ページのアドレスです。

注意： インストール後にサイト名を変更することはできません。

- **プライマリ・ホスト** : プライマリ・ホストの絶対ホスト名およびドメイン名。このフィールドは、**リモート・ノード・インストール**の場合のみ表示されます。
- **ブート・ポート** : Oracle Request Broker が稼動するポート番号。
- **サイト管理者** : Oracle Application Server Manager を使用して管理作業を実行する Oracle Application Server ユーザーの名前。
- **Node Manager ポート** : Node Manager リスナーが稼動するネットワーク・ポート番号。デフォルトのポート番号は 8888 です。
- **Admin リスナー・ポート** : Administration Utility リスナーが稼動するネットワーク・ポート番号。デフォルトのポート番号は 8889 です。このフィールドは、**カスタム・リモート・ノード・インストール**の場合は表示されません。
- **Web リスナー名** : 一般的なリクエストに使用される Web リスナーの名前。デフォルトの Web リスナー名は `www` です。
- **サイト・リスナー・ポート** : リスナーがクライアントからリクエストおよび情報を受信するポート番号。
- **マルチキャスト IP アドレス** : グループ・メッセージ（マルチキャストとも呼ばれる）の IP アドレス。
- **マルチキャスト・ポート番号** : マルチキャスト・グループ・メッセージを受信するリスナー・ポート。

2. ご使用のネットワーク環境に合う認証方式を選択し、「次」をクリックします。この画面は、**標準インストール**の場合は表示されません。

図 3-19 Authentication Methods



「Authentication Methods」画面では、認証サポートに使用できる外部認証方式を選択できます。

Oracle Advanced Security により、ネットワーク上で認証、暗号化、チェックサムおよびシングル・サインオン・サービスが使用できます。認証を使用すると、ネットワーク上のユーザーの識別情報の妥当性チェックを行うことによりセキュリティが確保されます。認証サービスは、Oracle Advanced Security のインストール時には自動的にインストールされません。複数の認証方式を選択するには、[Shift] キーを押しながらグループを選択するか、または [Ctrl] キーを押しながら個別の方式を選択します。

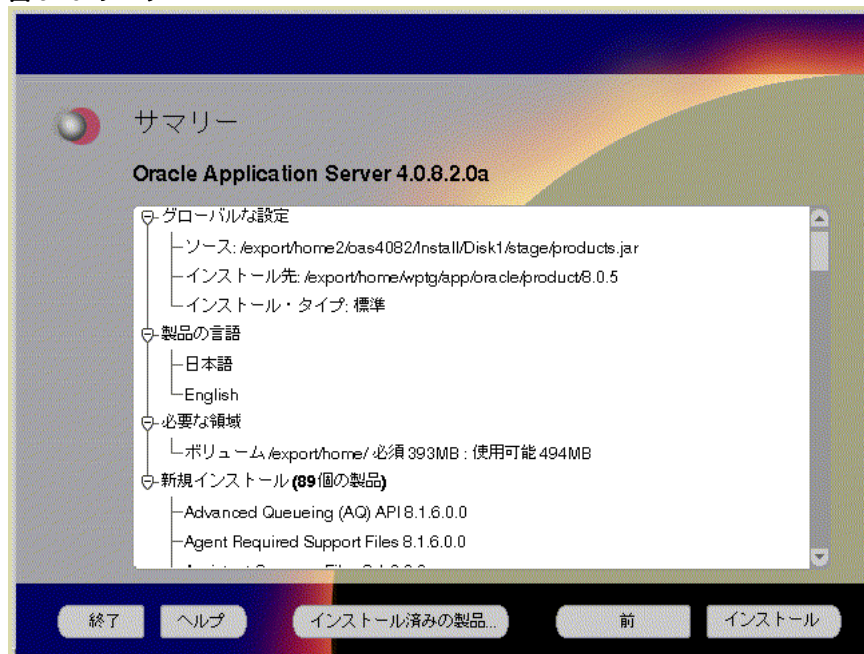
認証サポート用に使用できる認証方式は、次のとおりです。

- **Entrust:** これは Entrust Technologies 社が提供する認証システムで、ユーザーは、Entrust Profile を使用して、証明書および秘密鍵の格納、および資格証明管理の保護を行うことができます。Oracle Advanced Security では、Oracle Wallet からユーザーの資格証明（秘密鍵および証明書）にアクセスするかわりに、ユーザーの Entrust Profile にアクセスして認証およびシングル・サインオンを行います。

- **Identix:** これは Identix 社が提供するハードウェア・デバイスで、生体的識別テクノロジーを使用してユーザーを識別します。各ユーザーは、自分の指紋を使用して自分自身を認証します。
- **Radius (Remote Authentication Dial-In User Service) :** これはクライアント / サーバー型セキュリティ・プロトコルで、リモート認証およびリモート・アクセスが可能なことで特に知られています。Oracle Advanced Security では、Radius プロトコルをサポートするすべての認証方式を使用できるよう、この標準をクライアント / サーバー・ネットワーク環境で使用しています。Radius は、トークン・カード、スマート・カードおよび生体的識別を含めた様々な認証方式とともに使用できます。
- **SecurID:** これは Security Dynamics 社が提供する認証サーバーおよびトークン・ベースのハードウェア・デバイスです。これらのデバイスは、各ユーザーごとに、システムへのアクセス権を取得する前に必要となります。各デバイスに 60 秒ごとに変化する番号が表示され、ユーザーは、Oracle サービスへのアクセス権を取得する前に正しい番号を入力する必要があります。
- **Kerberos:** これはトラステッド・サードパーティによる認証システムで、共有シークレットに依存し、サードパーティが安全であることを前提としています。パスワードを集中管理することによりユーザーのシングル・サインオン機能を可能にし、PC のセキュリティを強化します。Kerberos 認証サーバーは、物理的に安全なマシンにインストールする必要があります。

3. サマリーを確認し、「インストール」をクリックして、インストール・プロセスを開始します。

図 3-20 サマリー



「サマリー」画面では、実際のインストール・プロセスの開始前にすべての設定の概要を確認できます。ソース、インストール先、インストール・タイプ、製品の言語、必要な領域、およびコンポーネントのリストが含まれます。

これらの設定を変更するには、「前」をクリックして対応する画面に戻ります。

注意： ディスク領域が不足している場合は、「必要な領域」の項目に赤字でその旨が示されます。

「インストール」をクリックすると、インストールが開始されます。

4. インストール・プロセスを監視し、「次」をクリックします。

図 3-21 インストール



製品がインストールされている間、「インストール」画面が表示されます。インストール処理には、ファイルのコピーおよびリンク、さらに判別ポイントおよび計算の実行などのアクションが含まれます。

- **取消:** インストール・プロセスを中断します。その後、個別のコンポーネントまたは製品全体のどちらのインストールを中断するかを選択できます。

「インストール」画面には、インストール・ログの絶対パスが表示されます。

- 最新のログ・ファイルは、`oraInventory/logs/installActions.log` です。
- 以前のインストール・セッションのログ・ファイルは、`installActionsdatetime.log` の形式です。

「インストール」画面には、インストール・ログの絶対パスが表示されます。インストール・ログの詳細は、2-9 ページの「[oraInventory ディレクトリ](#)」を参照してください。

インストール完了後、Oracle Universal Installer により `root.sh` スクリプトの実行を促すプロンプトが表示されます。次のステップに従って `root.sh` スクリプトを実行します。

- a.** `$ORACLE_HOME` ディレクトリに移動します。

```
$ cd $ORACLE_HOME
```

- b.** `root` ユーザーでログオンします。

- c.** `root.sh` スクリプトを実行します。

```
$ ./root.sh
```

- d.** 次のメッセージが表示されたら、`root` ユーザー・アカウントを終了します。

```
Finished running generic part of the root.sh script  
Now product-specific root actions will be performed
```

`root.sh` スクリプトにより、次の内容が検出されます。

- `ORACLE_OWNER`、`ORACLE_HOME` および `ORACLE_SID` 環境変数の設定。
- ローカルの `bin` ディレクトリの絶対パス。デフォルトを使用するか、別のローカルの `bin` ディレクトリに変更します。

5. 構成ツールのリストを設定し、「次」をクリックします。

図 3-22 構成ツール



「構成ツール」画面には、インストール済みのすべてのコンポーネントの構成ツールのリストが表示されます。

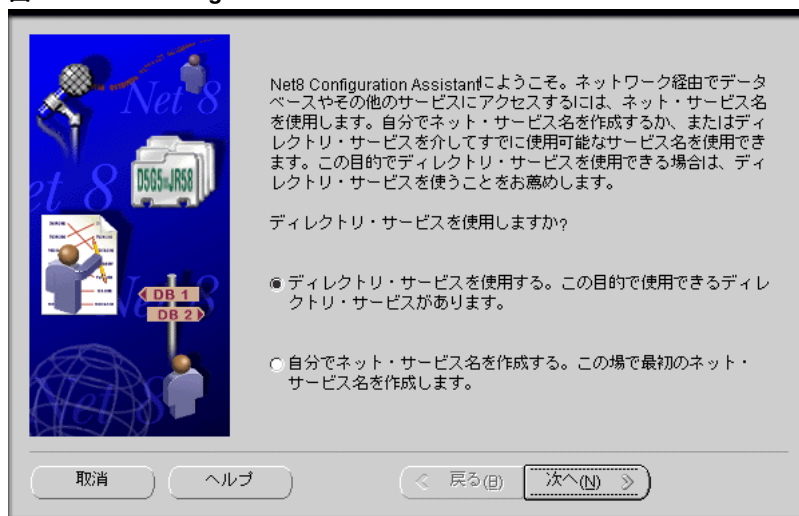
リストを下へスクロールし、各ツールの設定ステータスを確認します。コンポーネントが設定されると、それに合わせてステータスが変化します。

この画面で、Oracle Universal Installer により、次の機能が実行されます。

- 「使用可能な製品コンポーネント」画面で選択した各コンポーネントに対し、構成ツールが実行されます。
- 各コンポーネントに対する構成ツールの実行中に、表示ウィンドウにすべての設定が表示されます。
- すべての構成ツールの実行後に、設定を参照できます。変更内容を確認するには、コンポーネントをクリックします。
- 実行が失敗した処理に関するデータが表示ウィンドウに表示されます。エラーを修正して「再試行」をクリックし、再び構成ツールを実行するか、あるいはエラーを無視して「次」をクリックし、次の画面に進みます。

- **再試行**: コンポーネントの設定が失敗した場合に、設定スクリプトを再実行します。
 - **中止**: 設定プロセスを終了します。
6. Net8 Configuration Assistant を実行して Net8 を設定します。設定後、Oracle Universal Installer に戻り、「次」をクリックします。

図 3-23 Net8 Configuration Assistant



Net8 Server または Net8 Client がインストールされると、Oracle Universal Installer により、自動的に Net8 Configuration Assistant が起動されます。Net8 Configuration Assistant は、Oracle のクライアント / サーバー・ネットワーク環境を設定するためのグラフィカル・ユーザー・インタフェース (GUI) ツールです。

Net8 Configuration Assistant は、次のいずれかの方法で起動されます。

- すべてのインストール・タイプについて、Oracle Universal Installer から自動的に起動される。
- スタンドアロン・ツールとして手動で起動する。

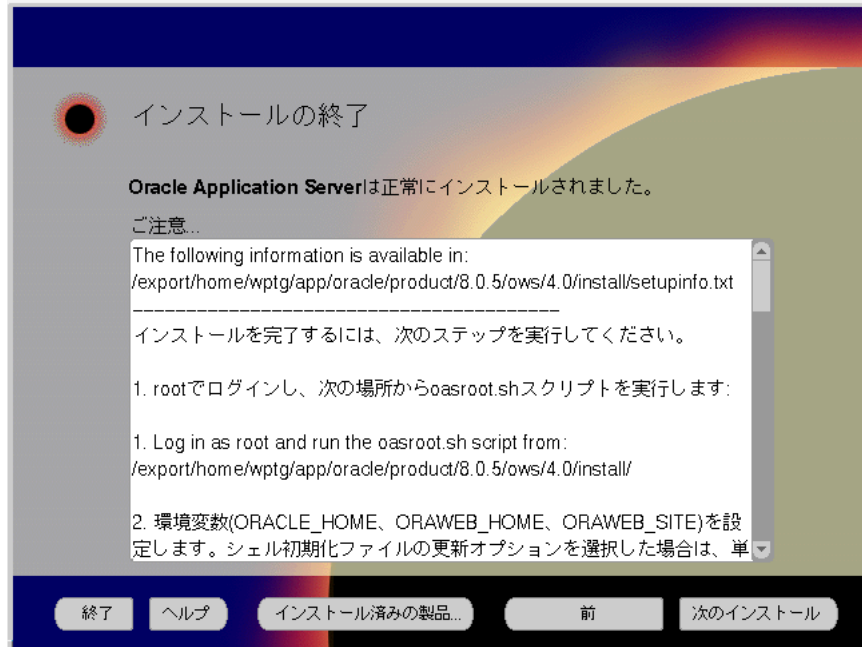
手動で Net8 Configuration Assistant を起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ $ORACLE_HOME/bin/netca
```

Net8 Configuration Assistant の指示に従って、Net8 を設定します。Net8 Configuration Assistant の詳細は、2-7 ページの「[Net8 の設定](#)」および『Oracle8i Net8 管理者ガイド』を参照してください。

7. インストール後の作業ステップのリストを下へスクロールします。

図 3-24 インストールの終了



「インストールの終了」画面には、インストールを完了するための手順および Oracle Application Server の簡単な概要が表示されます。必ず下へスクロールして、すべての設定を検証してください。

この画面には、次の機能ボタンが表示されます。

- **構成ツール**: 追加の構成ツールを選択し、実行します。
 - **終了**: インストール・プロセスを中断して Oracle Universal Installer を終了します。
 - **ヘルプ**: 「インストールの終了」画面の使用に関する詳細情報を表示します。
 - **インストール済みの製品**: 現在インストールされている製品を表示したり、製品全体またはコンポーネントをアンインストールします。
 - **前**: 前の画面に戻ります。
 - **次のインストール**: 「ようこそ」画面に戻り、次の製品をインストールします。
8. 「終了」をクリックしてインストール・プロセスを終了するか、または「次のインストール」をクリックして別の製品をインストールします。

インストール後の作業

この章では、Oracle Application Server のインストールを完了するために必要な、インストール後の設定作業について説明します。Oracle Application Server の使用方法に関する簡単な概要についても説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- [インストール後の設定作業](#)
- [Oracle Application Server の開始にあたって](#)

Oracle Application Server の設定に関する手順の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

インストール後の設定作業

次のインストール後の設定作業を実行し、Oracle Application Server のインストールを完了します。

- `oasroot.sh` スクリプトの実行
- `.login` および `.profile` 初期化ファイルの更新
- **Node Manager** の起動

インストール後の作業のステップは、次のテキスト・ファイルで参照できます。

```
$ORACLE_HOME/ows/4.0/install/setupinfo.txt
```

`oasroot.sh` スクリプトの実行

1024 番未満のポート番号のリスナーの開始および停止ができるように、root ユーザーで `oasroot.sh` ユーティリティを実行します。また、`oasroot.sh` ユーティリティを実行すると、他のユーザーが所有するリスナーの開始および停止が可能になります。

このスクリプトを実行するには、次の処理を行います。

1. `$ORACLE_HOME/ows/4.0/install` ディレクトリに移動します。
2. root ユーザーでログオンします。
3. 次のようにして、`oasroot.sh` スクリプトを実行します。

```
# ./oasroot.sh
```
4. root ユーザーを終了します。

`.login` および `.profile` 初期化ファイルの更新

`ORAWEB_HOME` および `ORAWEB_SITE` などの環境変数は、`.login` および `.profile` 初期化ファイルの更新時に設定されます。

これらを更新するには、次のようにします。

- インストール中に `.login` および `.profile` 初期化ファイルを自動的に更新するように選択した場合、新規設定が有効になるように、この時点でシェル初期化ファイルを実行してください。

C シェルの場合：

```
$ source ~/.login
```

Bourne/Korn シェルの場合：

```
$ . $HOME/.profile
```

- インストール中に Oracle Universal Installer で `.login` および `.profile` ファイルを更新しないように選択し、ログインのたびにこれらのファイルを実行しないようにした場合、次のスクリプトのいずれかを実行して更新してください。

C シェルの場合：

```
$ source $ORACLE_HOME/ows/4.0/install/owsenv_csh.sh
```

Bourne/Korn シェルの場合：

```
$ source $ORACLE_HOME/ows/4.0/install/owsenv_bsh.sh
```

Node Manager の起動

次のコマンドを実行し、Node Manager を起動します。

```
$ owsctl start -nodemgr
```

Oracle Application Server のインストールおよび設定が完了しました。Oracle Universal Installer 上の「終了」をクリックします。

Oracle Application Server の開始にあたって

ここでは、Oracle Application Server について次のような説明および簡単な情報を示します。

- [Oracle Application Server Web サイトへの接続](#)
- [OAS Manager を使用した Oracle Application Server の起動](#)
- [「OAS ユーティリティ」 ページへの接続](#)
- [コマンドライン・ユーティリティ](#)
- [セキュリティ](#)

Oracle Application Server Web サイトへの接続

Oracle Universal Installer を終了したら、次のようにして Oracle Application Server Web サイトに接続します。

1. Oracle Application Server の「Welcome」 ページに接続します。

図 4-1 Oracle Application Server の「Welcome」 ページ



Oracle Application Server でサポートされている任意の Web ブラウザを使用して、次の URL に接続します。

`http://hostname.domain:port_number`

この `port_number` は、インストール時に Node Manager に指定したポート番号を指します。

たとえば、次のようになります。

`http://hal.us.oracle.com:8888`

Oracle Application Server でサポートされているブラウザについては、1-2 ページの「ソフトウェア要件」の表を参照してください。

2. インストール中に記録したサイト管理者名とパスワードを入力します。

OAS Manager を使用した Oracle Application Server の起動

OAS Manager を使用して Oracle Application Server を起動するには、次のステップを実行します。

1. 「OAS Manager」アイコンをクリックします。

Oracle Application Server の「Welcome」ページに接続されたら、「OAS Manager」を選択します。OAS Manager サイトは、2 つのフレームに分かれています。左側にご使用の Web サイト名（デフォルトは「website40」）が表示され、右側にこの Web サイトのステータスを示す表が表示されます。


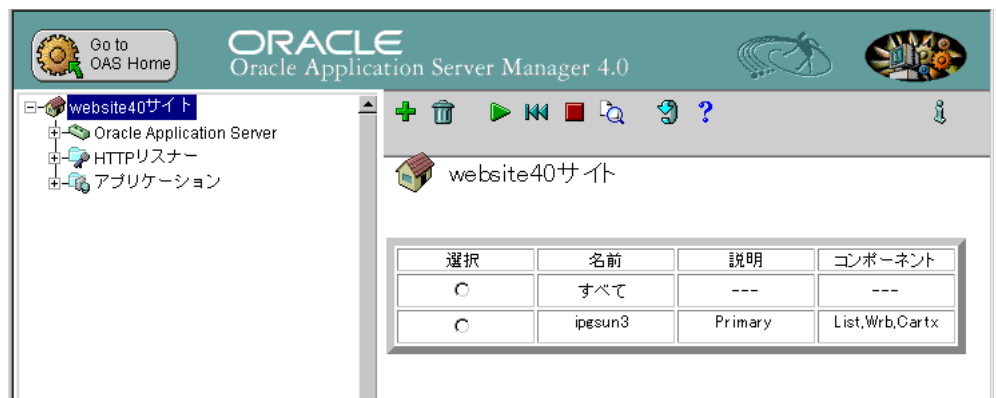
2. 「すべて」を選択して、「開始」ボタン  をクリックします。

図 4-2 OAS Manager サイト



次のコンポーネントが自動的に開始されます。

- Oracle Request Broker (ORB)
- すべての Web Request Broker (WRB) プロセス
- 設定済みのすべての Web リスナー

起動されたプロセスに関するメッセージが入った HTML ページが表示されます。すべてのプロセスが正常に起動されたら、ページの一番下にある「OK」をクリックします。

3. リモート・ノードをマルチ・ノード・インストレーションの一部としてインストールした場合、このリモート・ノードを Oracle Application Server の Web サイトに追加してください。

リモート・ノードの追加の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

「OAS ユーティリティ」ページへの接続

「OAS ユーティリティ」ページから、Oracle Application Server に含まれるすべてのユーティリティにアクセスできます。「OAS ユーティリティ」ページは、Logger の設定や外部リスナーの登録などの作業に使用します。「OAS ユーティリティ」ページは、デフォルトでは `hostname.domain:8889` に存在します。ご使用の Web ブラウザでこの URL を入力するか、または次のいずれかの方法でアクセスできます。



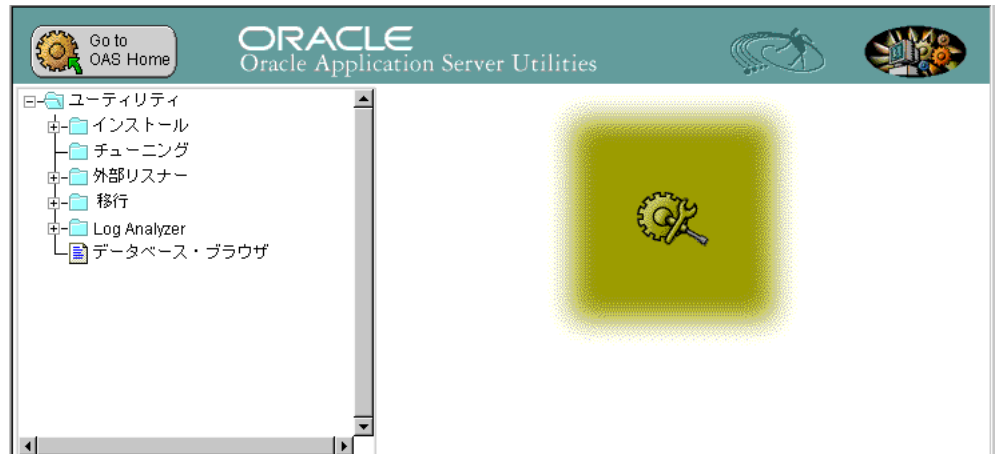
1. ページの一番上の  アイコンをクリックします。
2. 「OAS ユーティリティ」アイコン  をクリックします。
3. ナビゲーション・ツリーの「ユーティリティ」を拡張します。これにより、Oracle Application Server ユーティリティが表示されます。

図 4-3 Oracle Application Server ユーティリティ



OAS ユーティリティの詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

コマンドライン・ユーティリティ

Oracle Application Server には、OAS Manager を使用してブラウザで実行可能な機能と同じ機能を実行するコマンドライン・ユーティリティがいくつか用意されています。

コマンドライン・ユーティリティの詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

コマンドライン・ユーティリティを使用するには、次の環境変数を設定する必要があります。

- ORAWEB_HOME: Oracle Application Server がインストールされている絶対パス。
\$ORACLE_HOME/ows/4.0 にする必要があります。Oracle Application Server は、\$ORACLE_HOME ディレクトリの一部である ORAWEB_HOME ディレクトリにインストールされています。
- ORAWEB_SITE: Oracle Application Server のサイト名。
- ORACLE_HOME: Oracle 製品がインストールされるディレクトリの絶対パス。

このセクションで説明されているコマンドライン・ユーティリティは、次のとおりです。

- oasmcastcfg: グループ・メッセージに必要なマルチキャスト IP アドレスおよびポート番号を取得したり、変更します。

次の表に、oasmcastcfg ユーティリティの例をいくつか示します。

表 4-1 oasmcastcfg ユーティリティの例

コマンド名	機能
oasmcastcfg show	グループ・メッセージの設定情報の表示
oasmcastcfg set	グループ・メッセージの設定情報の変更

- owsctl: Web Request Broker (WRB)、Object Request Broker (ORB) およびリスナーの開始、停止およびステータスのモニターを行います。

owsctl 構文のサマリーを表示する場合は、次のコマンドを入力します。

```
$ owsctl -h
```

次の表に、owsctl ユーティリティの例をいくつか示します。

表 4-2 owsctl ユーティリティの例

コマンド名	機能
owsctl start -nodemgr	Node Manager の開始
owsctl stop -nodemgr	Node Manager のシャットダウン
owsctl start	WRB、ORB およびリスナーの起動
owsctl stop	OAS Web サイトのシャットダウン

セキュリティ

多くの Oracle Application Server コマンドを使用して、重要な設定を変更できます。たとえば、Oracle Application Server がインストールされているシステムのファイルにアクセス可能であれば、誰でもサイトのパスワードを変更できます。このため、オペレーティング・システムによる保護を使用してサイトを保護してください。

oaspasswd ユーティリティのアクセス制限に関する詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の付録 A を参照してください。

アンインストール

この章では、Oracle Application Server のアンインストール・プロセスおよび再インストール・オプションについて説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- [アンインストール](#)
- [再インストール](#)

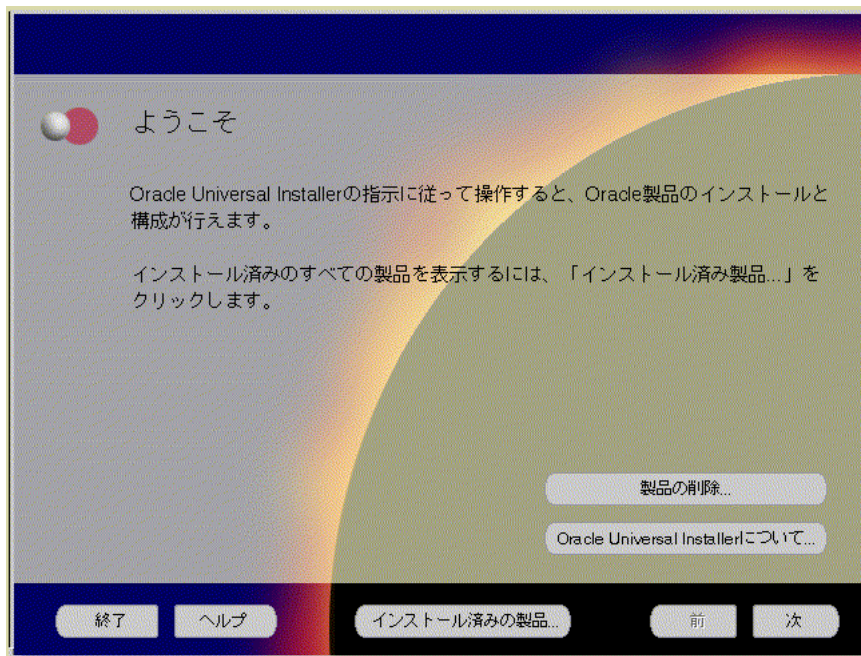
アンインストール

Oracle Universal Installer を起動すると、「ようこそ」画面が表示されます。Oracle Universal Installer の起動方法は、3-2 ページの「[Oracle Universal Installer の起動](#)」を参照してください。アンインストールを行うには、次のステップを実行します。

注意： Oracle Universal Installer の起動前に、Oracle Application Server が実行中でないことを確認してください。Oracle Application Server の停止方法の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

1. 「製品の削除」または「インストール済みの製品」をクリックすることにより、製品をアンインストールできます。

図 5-1 ようこそ



- **製品の削除：** 個別のコンポーネントまたは製品全体をアンインストールできます。
- **インストール済みの製品：** 現在インストールされている製品を表示し、単独のコンポーネントまたは製品全体をアンインストールします。

2. インストール済みのコンポーネントを確認し、アンインストールするコンポーネントにチェックを付けて、「削除」をクリックします。

図 5-2 インベントリ



「製品の削除」をクリックすると、「インベントリ」画面が表示されます。「インベントリ」画面は、任意の画面で「インストール済みの製品」をクリックした場合にも表示されます。

「インベントリ」画面には、\$ORACLE_HOME ディレクトリにインストールされているすべてのコンポーネントが表示され、次のボタンが含まれています。

- **ヘルプ**: 「インベントリ」画面の使用方法に関する詳細情報を表示します。
- **削除**: チェックが付いたコンポーネントをすべて \$ORACLE_HOME からアンインストールします。
- **別名で保存**: インベントリをテキストとして保存します。「別名で保存」をクリックすると、ファイル・ブラウザ・ダイアログが表示されます。表示されているファイル名を受け入れると、「インベントリ」画面に表示されているインベントリがこのファイルにテキストとして記録されます。
- **クローズ**: 「インベントリ」画面を終了します。
- **場所**: 選択したコンポーネントの場所を示す絶対パスが表示されます。

注意： 製品名の前に「+」記号が表示されている場合は、その製品内にさらに他のコンポーネントまたはファイルがインストールされていることを示します。依存コンポーネントを表示するには、「+」記号をクリックします。ある製品またはコンポーネントの削除を選択すると、その依存コンポーネントおよびファイルもすべてアンインストールされます。

Oracle Application Server を完全にアンインストールする場合は、\$ORACLE_HOME ディレクトリ名のすぐ下に表示されている製品名の前のボックスにチェックを付けます。

注意： ある製品またはコンポーネントをアンインストールすると、その依存コンポーネントおよびファイルもすべてアンインストールされます。

3. アンインストールするコンポーネントが選択されていることを確認し、「はい」をクリックします。

図 5-3 確認



「確認」画面には、アンインストールするように選択したコンポーネントがすべてリスト表示されます。画面を下へスクロールし、選択したコンポーネントを検証します。

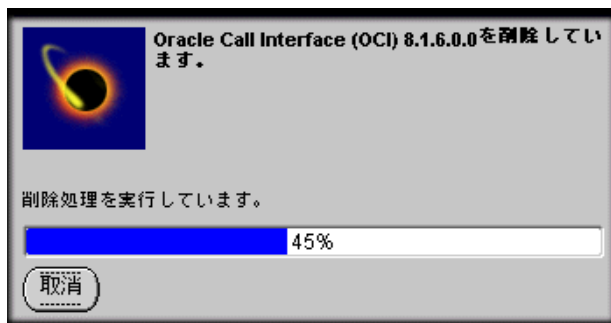
注意： Oracle Universal Installer は、アンインストールではすべてのファイルおよびディレクトリをアンインストールしません。これらのファイルおよびディレクトリを手動で削除する必要があります。

「確認」画面には、次のボタンが表示されます。

- **ヘルプ**: 「確認」画面の使用方法に関する詳細情報を表示します。
- **はい**: リストに表示されたコンポーネントのアンインストールを開始します。
- **いいえ**: 「インベントリ」画面に戻ります。リストに表示されたコンポーネントは、ORACLE_HOME から削除されません。

4. アンインストール・プロセスを監視します。

図 5-4 削除



「削除」画面は、「削除」をクリックすると表示されます。Oracle Universal Installer により、「インベントリ」画面でアンインストールするように選択されたコンポーネントがすべて検出され、\$ORACLE_HOME ディレクトリから削除されます。

アンインストール・プロセスを中断するには、「取消」をクリックします。

再インストール

Oracle Universal Installer では、すでにインストール済みのバージョンに上書きで Oracle Application Server を再インストールすることはできません。

- Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 を同じバージョン上に再インストールするには、製品をアンインストールしてから再びインストールします。
- Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 を Oracle Application Server の前バージョン上に再インストールするには、Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 のインストール前に、前バージョンをアンインストールしてください。

前バージョンからの移行

この章では、Oracle Application Server の前バージョンから Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 への移行方法について説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- [移行前に](#)
- [Oracle Application Server 4.0.x からの移行](#)
- [アプリケーションの移行](#)

移行前に

移行ユーティリティにより、前バージョンの Oracle Application Server を Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 に移行します。

オラクル社では、新しいリリースの設定を行う前に、以前のリリースの Oracle Application Server を移行することをお勧めします。そうしないと、移行ユーティリティにより、リリース 4.0.8.2 の設定情報が以前のバージョンの設定情報で上書きされる可能性があります。

この項では、移行前の考慮点について説明します。

Database Access Descriptor (DAD)

移行ユーティリティでは、前バージョンの DAD とリリース 4.0.8.2 で設定された DAD が同じ名前を共有している場合、この DAD を移行することはできません。たとえば、リリース 4.0.8.x で設定された Samuel という名前の DAD が存在し、リリース 4.0.8.2 にも Samuel という名前の DAD が存在する場合、移行ユーティリティは 4.0.8.x の Samuel という DAD を移行しません。移行前に、前バージョンの DAD を削除してください。DAD の詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』の「DAD の設定」の章を参照してください。

仮想パス

移行ユーティリティは、前バージョンの Oracle Application Server と Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 との間で、仮想パスが重複しているかどうかを検証しません。移行前に、Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 の各仮想パスが前バージョンで使用されていないかどうかを検証してください。リリース 4.0.8.2 に同名の仮想パスが存在する場合、移行中に上書きされます。

許可

前バージョンの Oracle Application Server から移行する前に、前バージョンの設定ファイルにアクセスする許可が移行ユーティリティ（Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 のユーザーで実行する）にあるかどうかを確認する必要があります。アクセス許可がない場合、設定ファイルにアクセスできないことを示すエラー・メッセージが移行ユーティリティにより表示されます。

SSL 証明書

前バージョンの Oracle Application Server から Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 にアップグレードする場合、前バージョンの秘密鍵もアップグレードしてください。詳細は、『Oracle Application Server セキュリティ・ガイド』の SSL に関する章を参照してください。

重複するアプリケーション・ファイル名

移行時に重複するアプリケーション名がある場合、移行ユーティリティはいずれの設定情報も上書きしません。Oracle Application Server 4.0.x のアプリケーションまたはカートリッジが Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 に存在する場合、移行ユーティリティはそのアプリケーションまたはカートリッジを移行しません。Oracle Application Server リリース 4.0.8.1 のアプリケーションを移行ユーティリティを使用して上書きする場合は、アプリケーションを削除するか、または名前を変更してから移行を実行します。

制限事項

次のものは移行できません。

- サンプル・アプリケーション。移行後に手動で追加してください。
- サードパーティ製のリスナー。移行後に手動で追加してください。
- トランザクション。移行後に手動で追加してください。詳細は、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
- 環境変数。Oracle Application Server のドメインに環境変数が設定されていない場合、環境変数は移行されません。新しくインストールした Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 で環境変数を設定してください。
- MIN/MAX カートリッジ・パラメータ。MIN/MAX パラメータは、移行後に手動で再設定してください。
- VRML カートリッジ。VRML カートリッジは Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 ではサポートされません。

Oracle Application Server 4.0.x からの移行

次のバージョンから Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 への移行が可能です。

- Oracle Application Server リリース 4.0.8.1

プライマリ・ノードの移行ステップ

注意： 移行時には、前バージョンで使ったプライマリ・ノードと同じノードを使用してください。

プライマリ・ノードを移行するには、次のステップを実行します。

1. Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 をインストールします。
2. プライマリ・ノードの「Welcome」画面から「OAS ユーティリティ」をクリックして、Oracle Application Server の移行ユーティリティに接続します。ツリーの「ユーティリティ」を拡張して、「移行」をクリックします。
3. Oracle Application Server の該当するバージョンの下の子構造を拡張します。
4. プライマリ・ノードを選択します。
5. 移行するバージョンの Oracle Application Server の場所（ORACLE_HOME）を入力します。

次のコンポーネントが自動的に移行されます。

- WRB
- Web リスナー（ローカル）
- カートリッジ / アプリケーション

前述のコンポーネントに加えて、デフォルト・プロセスはすべて保存されますが、手動で追加した Oracle Application Server のプロセス（たとえば、**wrblog** などの別の Logger プロセス）は移行されません。

リモート・ノードのリスナーの移行ステップ

リモート・ノード・リスナーを移行するには、次のステップを実行します。

1. プライマリ・ノードの移行プロセスが完了した後、「ユーティリティ」ツリーを拡張し、「移行」をクリックします。
2. 「4.0.x」、「リモート・ノード」の順で選択します。
3. 移行するリスナーが存在するすべてのノードの Node Manager が稼動しているかどうかを確認します。
4. 移行ユーティリティから、リモート・ノード（稼動するリスナーがすでに設定されているノード）の候補リストが表示されます。設定済みのリモート・ノードが存在するリスナーのみ移行してください。
5. 移行するリモート・ノードを選択し、次に \$ORACLE_HOME ディレクトリを入力します。

移行を元に戻す

変更されるすべての設定ファイルについて、バックアップが作成されます。変更される設定ファイルは、プライマリ・ノードの **wrb.app** と **site.app**、リスナーが設定されているサイト内の各ノードの **owl.cfg** ファイルです。

移行中に、これらのファイルは変更され、次のようにバックアップが作成されます。

- **wrb.app** → **mig_wrb.bak**
- **site.app** → **mig_site.bak**
- **owl.cfg** → **mig_owl.bak**

これらのファイルの設定情報の移行中に致命的なエラーが発生した場合、これらのファイルは移行前の状態に自動的にロールバックされます。「Duplicate application name」や「Duplicate listener name」などの致命的でないエラーが発生した場合、このロールバックは行われません。

移行の結果を元に戻す必要がある場合、バックアップ・ファイルを手動でロールバックできます。移行が異常終了した場合または移行の結果に満足がいかない場合も、手動でロールバックを実行する必要があります。

移行処理

この項では、移行中に行われる処理について説明します。

WRB

移行中に、移行ユーティリティは次の処理を行います。

- 既存の認証設定情報を、すべて Oracle Application Server 4.0.x の `wrb.app` ファイルから Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 の `wrb.app` ファイルにコピーする。
- Oracle Application Server 4.0.x の Database Access Descriptor をすべてリリース 4.0.8.2 にコピーする。

リスナー

各リスナーごとに、移行ユーティリティは次の処理を行います。

- リスナー・ディレクトリを作成し、リスナー情報を使用して `owl.cfg` ファイルを更新する。
- リスナー・ディレクトリの所有権を変更する。
- リスナー設定ファイルを、Oracle Application Server リリース 4.0.x から Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 にコピーする。
- 設定ファイルを変更して、[MultiPort] セクション、「ServerPID」、「AdminFile」および「Adapter」ファイル・フィールドのディレクトリ・パスを更新する。

アプリケーション

移行ユーティリティは、Oracle Application Server リリース 4.0.x および選択した Web サイトに配布済みのアプリケーションをすべて識別します。

JCO 以外の各アプリケーションに対して、移行ユーティリティは次の処理を行います。

- wrb.app ファイルからアプリケーション・パラメータを抽出し、新規パラメータ・ファイルを作成する。
- この新規パラメータ・ファイルを \$ORAWEB_HOME/install ディレクトリに保存する。
- 新規ファイルを Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 に登録する。
- アプリケーションに登録済みの各カートリッジについて、次の処理を行う。
 - Oracle Application Server リリース 4.0.x からカートリッジ・パラメータを抽出し、新規カートリッジ設定ファイルを作成する。
 - 新規カートリッジ設定ファイルを Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 に登録する。
 - この新規カートリッジ・パラメータ・ファイルを \$ORAWEB_HOME/install ディレクトリに保存する。

各 JCO アプリケーションに対して、移行ユーティリティは次の処理を行います。

- アプリケーションの .jar ファイルの場所を、wrb.app ファイルから抽出する。
- .jar ファイルを JCO アプリケーション実行ユーティリティに渡し、新規ファイルを再生成する。
- 新規ファイルを Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 に登録する。

アプリケーションの移行

この項では、アプリケーションの移行について説明します。

Java ベースのアプリケーション

Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 では、Java 1.2 を使用しており、Oracle Application Server の前リリース用に作成されたアプリケーションとの間で互換性の問題が発生します。互換性の問題に関する詳細は、Java 1.2 のドキュメントの「Version Compatibility with Previous Releases (Java2 SDK 旧バージョンとの互換性)」を参照してください。

JavaServer Pages

Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 への移行前に 4.0.8.1 の JSP パッチをダウンロードして JSP アプリケーションを Oracle Application Server サイトに追加した場合は、次の手順で JavaServer Pages が正しく動作するかどうか確認する必要があります。

1. JSP アプリケーションを手動で削除する。アプリケーションの削除については、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。
2. 必要な JSP アプリケーションを追加する。アプリケーションの追加については、『Oracle Application Server 管理者ガイド』を参照してください。

EJB および ECO/Java アプリケーション

Oracle Application Server の前バージョン用に設計された EJB および ECO/Java アプリケーションは、Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 では正しく機能しない可能性があります。アプリケーションの移行の詳細は、『Oracle Application Server EJB、ECO/Java および CORBA アプリケーション開発者ガイド』を参照してください。

この付録では、次の環境変数について説明します。

- ORACLE_HOME
- ORACLE_BASE
- ORAWEB_HOME
- ORAWEB_SITE
- ORAWEB_ADMIN
- TNS_ADMIN
- LIBPATH - AIX-Based Systems の場合
- SHLIB_PATH - HP 9000 の場合
- LD_LIBRARY_PATH - Compaq、Solaris Intel および Linux の場合
- CLASSPATH
- PATH
- TMPDIR

ORACLE_HOME

\$ORACLE_HOME は、Oracle Application Server ソフトウェアがインストールされるルートまたは基本ディレクトリです。Oracle Application Server は、Oracle8i リリース 8.1.6 以外の Oracle 製品と同じ \$ORACLE_HOME ディレクトリに共存することはできません。他の Oracle 製品または Oracle Application Server の以前のバージョンがすでにインストールされている場合は、Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 を別の \$ORACLE_HOME ディレクトリにインストールしてください。

ORACLE_BASE

OFA ディレクトリ構造の場合は、設定ファイルを保存するディレクトリとして ORACLE_BASE を設定してください。OFA の詳細は、2-5 ページの「[ORACLE_BASE 環境変数の設定](#)」を参照してください。\$ORACLE_BASE ディレクトリの下に、製品ディレクトリ \$ORACLE_BASE/product と設定ディレクトリ \$ORACLE_BASE/admin が作成されます。\$ORACLE_HOME およびすべての製品ファイルは、\$ORACLE_BASE/product ディレクトリに入ります。設定ファイルおよびログ・ファイルは、\$ORACLE_BASE/admin ディレクトリに入ります。

ORAWEB_HOME

ORAWEB_HOME 環境変数により、Oracle Application Server がインストールされる \$ORACLE_HOME 内のディレクトリを指定します。Oracle Application Server リリース 4.0.8.2 では、ORAWEB_HOME 環境変数に \$ORACLE_HOME/ows/4.0 を設定してください。

ORAWEB_SITE

ORAWEB_SITE 環境変数により、Oracle Application Server のサイト名を指定します。1 つのノードに複数のサイトが存在する可能性があるため、ORAWEB_SITE 環境変数が使用されます。デフォルト値は website40 です。

ORAWEB_ADMIN

ORAWEB_ADMIN 環境変数により、設定ファイルが格納されるディレクトリを指定します。この変数は、Oracle Application Server のインストール時に自動的に設定されます。

TNS_ADMIN

TNS_ADMIN 環境変数には、システムの SQL*Net または Net8 の設定ファイルの場所を設定します。設定ファイルが存在しない場合は、SQL*Net または Net8 のドキュメントの説明に従って作成および設定してください。

LIBPATH - AIX-Based Systems の場合

LIBPATH 環境変数により、ライブラリの場所を指定します。次の指定を含むように LIBPATH 環境変数を設定します。

- `$ORACLE_HOME/orb/4.0/lib`
- `$ORAWEB_HOME/lib`

SHLIB_PATH - HP 9000 の場合

SHLIB_PATH 環境変数により、ライブラリの場所を指定します。次の指定を含むように SHLIB_PATH 環境変数を設定します。

- `$ORACLE_HOME/orb/4.0/lib`
- `$ORAWEB_HOME/lib`

LD_LIBRARY_PATH - Compaq, Solaris Intel および Linux の場合

LD_LIBRARY_PATH 環境変数により、ライブラリの場所を指定します。次の指定を含むように LD_LIBRARY_PATH 環境変数を設定します。

- `$ORACLE_HOME/orb/4.0/lib`
- `$ORAWEB_HOME/lib`

CLASSPATH

次の指定を含むように CLASSPATH 環境変数を設定します。

- `$ORAWEB_HOME/classes`
- `$ORAWEB_HOME/admin/classes`

PATH

PATH 環境変数には実行モジュールの検索パスを定義します。次の指定を含むように PATH 環境変数を設定します。

- `$ORAWEB_HOME/bin`
- `$ORACLE_HOME/bin`
- `$ORACLE_HOME/orb/4.0/bin`
- `$ORACLE_HOME/orb/4.0/admin/cgi`

- \$ORAWEB_HOME/admin/cgi
- スクリプト oraenv (BOURNE または Korn シェル)、または coraenv (C シェル) が存在するディレクトリ。デフォルトでは、/usr/local/bin です。これらのスクリプトにより、データベース管理者は、すべてのユーザーに共通の環境を設定したり、データベース間の移動を容易にすることが可能です。
- C コンパイラのディレクトリ (Pro*C を使用する場合のみ必要)
- /bin
- /usr/bin
- /usr/ccs/bin
- id
- . (現行ディレクトリの参照)
- make ユーティリティのディレクトリ

注意： ユーザーのパスに /usr/ucb が必要な場合、それを PATH 環境変数の一番最後に指定します。そうしないと、インストール時に問題が発生する可能性があります。ご使用の PATH 環境変数で、/usr/ccs/bin が /usr/ucb より前に設定されていることを確認してください。

TMPDIR

再リンク処理で、/tmp または /var/tmp ディレクトリのディスク領域が使用されます。インストール中に再リンクを指定する場合は、十分な一時領域があることを確認してください。ディスク領域は 20MB あれば十分です。

TMPDIR 環境変数を設定した後に、次のようにしてディレクトリをグローバルにアクセス可能にします。

```
$ chmod 777 $TMPDIR
```

索引

A

Admin リスナー・ポート
 サイトのセキュリティ, 3-21
「Authentication Methods」画面
 インストール, 3-30

D

DAD
 移行, 6-2

E

ECO/Java アプリケーション
 移行, 6-8
EJB アプリケーション
 移行, 6-8
Enterprise Edition
 Oracle Application Server, 3-15
Entrust
 認証方式, 3-30

I

Identix
 認証方式, 3-31
「Information」画面
 インストール, 3-25

J

Java ベースのアプリケーション
 移行, 6-8
JSP

移行, 6-8

K

Kerberos
 認証方式, 3-31

N

Net8 Configuration Assistant
 起動, 2-7
「Net8 Configuration Assistant」画面
 インストール, 3-36
Node Manager
 起動, 4-3
Node Manager ポート
 サイトのセキュリティ, 3-21

O

oasmcastcfg
 ユーティリティ, 4-7
oasroot.sh スクリプト, 4-2
OAS ユーティリティ
 Oracle Application Server, 4-6
 接続, 4-6
OFA ディレクトリ構造, 3-16
 OFA, 2-5
 ORACLE_BASE, 3-17
 非 OFA, 2-5
「Optimal Flexible Architecture Directory」画面
 インストール, 3-17
Oracle Application Server
 Enterprise Edition, 3-15
 OAS ユーティリティ, 4-6

- アンインストール, 5-1
- インストール, 3-1
- 起動, 4-4
- コマンドライン・ユーティリティ, 4-7
- 再インストール, 5-5
- セキュリティ, 4-8
- 「Oracle Application Server のバージョン」画面
 - インストール, 3-15
- Oracle Universal Installer
 - oraInventory ディレクトリ, 2-9
 - 情報, 2-8
- Oracle Web Listener
 - サイト・リスナー・ポート, 3-22
- 「Oracle Web Listener の設定」画面
 - インストール, 3-22
- ORACLE_BASE, A-2
 - OFA ディレクトリ構造, 3-17
 - 設定, 2-5
- ORACLE_HOME, 4-7, A-2
- Oracle 8.1.6.1 との非互換性
 - データベースの ORACLE_HOME の互換性, 2-5
- oraInventory ディレクトリ
 - Oracle Universal Installer, 2-9
- oratab ファイル, 2-4
- ORAWEB_HOME, 4-7, A-2
- ORAWEB_SITE, 4-7
- owsctl
 - ユーティリティ, 4-8

R

- Radius
 - 認証方式, 3-31
- root.sh, 3-34

S

- SecurID
 - 認証方式, 3-31
- SSL
 - 移行, 6-2

T

- TMPDIR, A-4
- TNS_ADMIN, A-2

U

- UNIX グループ名
 - 選択, 3-8
- 「UNIX グループ名」画面
 - インストール, 3-8

W

- WRB
 - 移行, 6-6

あ

- アプリケーション
 - 移行, 6-7
- アンインストール
 - Oracle Application Server, 5-1
 - 「インベントリ」画面, 5-3
 - 「確認」画面, 5-4
 - 「削除」画面, 5-5
 - 「ようこそ」画面, 5-2

い

- 移行, 6-1
 - DAD, 6-2
 - ECO/Java アプリケーション, 6-8
 - EJB アプリケーション, 6-8
 - Java ベースのアプリケーション, 6-8
 - JSP, 6-8
 - SSL, 6-2
 - WRB, 6-6
 - アプリケーション, 6-7
 - 仮想パス, 6-2
 - 許可, 6-2
 - 制限事項, 6-3
 - 重複するファイル名, 6-3
 - プライマリ・ノード, 6-4
 - リスナー, 6-6
 - リモート・ノード・リスナー, 6-5
 - ～を元に戻す, 6-5
- インストーラ
 - Oracle ホームのサポート, 2-3
- インストール
 - 「Authentication Methods」画面, 3-30
 - 「Information」画面, 3-25

Net8 設定画面, 3-36
「Optimal Flexible Architecture Directory」画面,
3-17
Oracle Application Server, 3-1
「Oracle Application Server のバージョン」画面,
3-15
「Oracle Web Listener の設定」画面, 3-22
「UNIX グループ名」画面, 3-8
「インストール」画面, 3-33
「インストール・タイプ」画面, 3-10
「インストールの終了」画面, 3-37
「グループ・メッセージの設定」画面, 3-23
「構成ツール」画面, 3-35
「コンポーネントの場所」画面, 3-13
「最適フレキシブル・アーキテクチャ」画面, 3-16
「サイト管理情報」画面, 3-19
「サイトのセキュリティ」画面, 3-20
「サマリー」画面, 3-32
「使用可能な製品コンポーネント」画面, 3-12
シングル・ノード, 2-6
「設定サマリー」画面, 3-28
セットアップ・オプションとインストール・オブ
ション, 3-5
「追加設定」画面, 3-26
「ファイルの場所」画面, 3-7
「ホスト/ドメイン名情報」画面, 3-18
マルチ・ノード, 2-6
「ようこそ」画面, 3-5
リモート・ノード, 2-6
「インストール」画面
インストール, 3-33
インストール先, 3-7
コンポーネントの場所, 3-13
ファイルの場所, 3-7
「インストール済みの製品」ボタン, 3-6
インストール・タイプ
カスタム・プライマリ・ノード, 3-10
カスタム・リモート・ノード, 3-11
標準, 3-10
「インストール・タイプ」画面
インストール, 3-10
「インストールの終了」画面
インストール, 3-37
インストール前の作業, 2-1
データベースの ORACLE_HOME の互換性, 2-4
「インベントリ」画面
アンインストール, 5-3

か

「確認」画面
アンインストール, 5-4
仮想バス
移行, 6-2

き

起動
Net8 Configuration Assistant, 2-7
Node Manager, 4-3
Oracle Application Server, 4-4
許可
移行, 6-2

く

グループ・メッセージ, 2-7
マルチキャスト IP アドレス, 2-8, 3-23
マルチキャスト・ポート番号, 2-8, 3-23, 3-24
「グループ・メッセージの設定」画面
インストール, 3-23

こ

更新
初期化ファイル, 4-2
構成ツール, 3-35
「構成ツール」画面
インストール, 3-35
コマンドライン・ユーティリティ
oasmcastcfg, 4-7
Oracle Application Server, 4-7
owsctl, 4-8
コンポーネント
使用可能な~, 3-12
代替の場所, 3-13
コンポーネントの場所
インストール先, 3-13
使用可能なディスク領域, 3-13
場所の変更, 3-13
必要な合計ディスク領域, 3-14
必要なディスク領域, 3-14
「コンポーネントの場所」画面
インストール, 3-13

さ

- 再インストール, 5-5
 - Oracle Application Server, 5-5
- 「最適フレキシブル・アーキテクチャ」画面
 - インストール, 3-16
- サイト管理
 - サイト名, 3-19
 - ブート・ポート, 3-20
 - プライマリ・ホスト, 3-19
- サイト管理者
 - サイトのセキュリティ, 3-21
- サイト管理者のパスワード
 - サイトのセキュリティ, 3-21
- 「サイト管理情報」画面
 - インストール, 3-19
- サイトのセキュリティ
 - Admin リスナー・ポート, 3-21
 - Node Manager ポート, 3-21
 - サイト管理者のパスワード, 3-21
 - サイトの管理, 3-21
- 「サイトのセキュリティ」画面
 - インストール, 3-20
- サイト名
 - サイト管理, 3-19
- サイト・リスナー・ポート
 - Web リスナー名, 3-22
- 「削除」画面
 - アンインストール, 5-5
- 「サマリー」画面
 - インストール, 3-32
- 参照
 - ファイルの場所, 3-7

し

- 「終了」ボタン, 3-6
- 「使用可能な製品コンポーネント」画面
 - インストール, 3-12
- 使用可能なディスク領域
 - コンポーネントの場所, 3-13
- 初期化ファイル
 - 更新, 4-2
- シングル・ノード
 - インストール, 2-6
 - プライマリ・ノード, 2-6
 - マルチ・ノード, 2-6

- マルチ・ノードのサイト, 2-6

せ

- 制限事項
 - 移行, 6-3
- 製品の言語, 3-12
- 「製品の削除」ボタン, 3-5
- セキュリティ
 - Oracle Application Server, 4-8
- 接続
 - OAS ユーティリティ, 4-6
- 設定サマリー, 3-28
- 「設定サマリー」画面
 - インストール, 3-28
- セットアップ・オプションとインストール・オプション
 - インストール, 3-5
- 選択
 - UNIX グループ名, 3-8

そ

- ソース
 - ファイルの場所, 3-7
- ソフトウェア, 1-2
- ソフトウェア要件
 - ブラウザ, 1-2

つ

- 「追加設定」画面
 - インストール, 3-26
- 「次」ボタン, 3-6

て

- データベースの ORACLE_HOME の互換性
 - Oracle 8.1.6.1 との非互換性, 2-5
 - インストール前の作業, 2-4

と

- ドメイン名, 3-18

に

認証方式, 3-30
 Entrust, 3-30
 Identix, 3-31
 Kerberos, 3-31
 Radius, 3-31
 SecurID, 3-31

は

場所の変更
 コンポーネントの場所, 3-13

ひ

非 OFA, 2-5
 OFA ディレクトリ構造, 2-5
必要な合計ディスク領域
 コンポーネントの場所, 3-14
必要なディスク領域
 コンポーネントの場所, 3-14

ふ

ファイルの場所
 参照, 3-7
 ソース, 3-7
「ファイルの場所」画面
 インストール, 3-7
ブート・ポート
 サイト管理, 3-20
プライマリ・ノード
 移行, 6-4
 シングル・ノード, 2-6
プライマリ・ホスト
 サイト管理, 3-19
ブラウザ
 ソフトウェア要件, 1-2

へ

「ヘルプ」ボタン, 3-6

ほ

保証されている～

 ソフトウェア, 1-6
「ホスト / ドメイン名情報」画面
 インストール, 3-18
ホスト名, 3-18

ま

「前」ボタン, 3-6
マルチキャスト IP アドレス
 グループ・メッセージ, 2-8, 3-23
 マルチキャスト・ポート番号, 2-8
 マルチ・ノード, 2-8
マルチキャスト・ポート番号
 グループ・メッセージ, 2-8, 3-24
 マルチキャスト IP アドレス, 2-8, 3-24
マルチ・ノード
 インストール, 2-6
 シングル・ノード, 2-6
 リモート・ノード, 2-6
マルチ・ノードのサイト
 シングル・ノード, 2-6
マルチ・ノードのサイト・オプション
 マルチ・ノード, 2-6

よ

「ようこそ」画面
 インストール, 3-5, 5-2

り

リスナー
 移行, 6-6
リモート・ノード
 インストール, 2-6
 マルチ・ノード, 2-6
リモート・ノード・リスナー
 移行, 6-5

